

当館研究紀要第十五号(平成二十八年(二〇一六)刊。以下「第十五号」と記す)で中村木子の生涯と作品について記し、木子の全体像を明らかにした。しかし、その後の平成三十年(二〇一八)、当館開催「白寿 江口草玄のすべて」<sup>(註1)</sup>で調査した資料類の中に、新たな木子関連の資料を発見した。これらの資料は、戦後の木子の書作や、墨人会初期の活動について、また、同郷の草玄との関係等がより詳らかになる資料であることから、ここに先の拙稿の補遺を記し、補完する。

### 補遺内容

第十五号に記した中村木子の、「一、生涯と年譜」の遺漏項目の追記、「二、作品」で作品三点の項目内容の追記と、遺漏作品八十点の追加、および「資料」での遺漏資料を各々追加する。<sup>(註2)</sup>

年譜と作品については、特に「二、作品」の章で四期に区分したうち、「第二期」『書之美』期・昭和二十一年(一九四六)から二十六年(一九五一)までの期間は上田桑鳩に師事していた時期となるが、桑鳩と同門の鈴木鳴鐸<sup>(註3)</sup>の主宰する『蒼穹』誌上<sup>(註3)</sup>名を確認することができた。木子は昭和二十一年(一九四六)八月に桑鳩に師事しているが、同郷の江口草玄が購読していた『碧樹』<sup>(註4)</sup>『蒼穹』<sup>(註5)</sup>を勧められ、加わっていったものと思われる。これは中央で活動する桑鳩と同門ではあるが、戦後は茨城県柿岡の地方を中心に活動し、中央と一線を画し、鳴鐸の書壇の動向を一步引いて見ながらの活動に参加することで自分の書作の方向を客観視しようとした為と思われる。木子の名の同誌への掲出は、草玄に遅れること八ヶ月、昭和二十四年(一九四九)一月である。また同誌上、昭和二十五年(一九五〇)二月に同人に推挙されている。しかし、地位的なもの確立しているが、あくまで一地方の団体であるという割り切りがあり、書の指導の上では鳴鐸による指導より、桑鳩からの指導による影響が木子の意識のなかでは強かったと『蒼穹』関連の発言<sup>(註6)</sup>追資十四、十五から窺える。同誌に掲載された作品187、201の籠字や、同二十五年十二月号の王羲之の鳴鐸臨書評に見られる「だから豪宕な作風の天来翁に通うものがあり、腕達者な桑鳩兄の作風に似る。」と書かれたことから裏付けられる。

また、墨人会結成に至る、翌二十七年(一九五二)一月当初の会合欠席を草玄に知らせる手紙<sup>(註7)</sup>追資二十九や、一月四日、京都童安寺での会合欠席の前年末の電報文<sup>(註8)</sup>追資三十が見つかり、直前まで予定を練り合わせ、緊迫した状況を裏付ける史料も見つかった。前年十一月中旬の長谷川三郎の現代美術の講演会後からの、翌年一月四日に墨人会を短期間で結成していく刻々の史料と云える。

一方、図203、204および210、215に見られる「第二期」『書之美』期でのα部への出品は、『墨美』<sup>(註9)</sup>に移っても線の構成と、その表情の探究に向けられていたことが、よりはっきりと窺われる資料である。図203のα部作品は長谷川三郎によって「すなおな、長い勉強の結果である。」と評されているが、明らかに「我」の甲骨文体そのままである。字形として僅かな斜線があるだけの垂直線と水平線とによる構造で、ここにはかろうじて線の表情はあるが動きはなく、新たな構成というよりは、古い文字の構造を追体験したものと考えられる。しかし、その後の図204以降になると、古代文字の垂直水平線だけではなく、運動性のある線の構成による探究

(註1) 平成三十年(二〇一八)五月二十六日から七月一日まで開催。

(註2) 作品の項目表記等は第十五号と同じ。

(註3) 鈴木鳴鐸は、明治三十六年(一八九三)五月一日、茨城県出身。名は重文。始め不佞、後に芥舟堂、鳴鐸、鐸亭、鐸子と号し、時に南仙子、天野斜師を用いた。自身の書院名を青郷書院とした。昭和四年(一九二九)、文檢に合格、比田井天来に師事し、同八年(一九三三)、天来門下による書道芸術社設立に参加、同十五年(一九四〇)の解散まで同人。同二十六年(一九五二)十二月二十八日歿。

(註4) 『蒼穹』は、茨城県新治郡瓦會村(現石岡市)の鈴木鳴鐸主宰の鏡書部会報。ガリ版印刷の小冊子で写真掲載はなく、古典や手本、鏡書出品作は籠字で掲載していた。昭和二十一年(一九四六)七月五日印刷『碧樹』として鳴鐸の青郷書院発行で創刊され、翌年三月三十一日印刷の第二巻第四号で鳴鐸を含め三同人の一人田野石亭が急逝したため、石亭の書院名「蒼穹」に改題、発行所も碧樹書社と変更される。木子の名の初出は同二十四年(一九四九)一月号(一月五日発行)で半紙隨意で六綴に掲載されている。鳴鐸の急病により同二十六年(一九五二)一月号(二月五日発行)で中断、同年十一月二十八日他界し、そのまま終刊となった。

(註5) 森田子龍編集発行の書芸術総合雑誌。昭和二十六年(一九五二)六月一日創刊号発行し、同五十六年(一九八二)年十月十五日第三〇一号で終刊した。当初は、長谷川三郎やイサム・ノグチらの協力を得て、欧米の書画的絵画の紹介、交流などの記事掲載もあったが、次第に

へと移行している。ここでは、運動性ある線の構成表現の可能性が探られていると見て良いだろう。

「第三期」墨人会期で、子供への書教育『墨友』<sup>註6</sup>、『ひびき』<sup>註7</sup>誌に見られる参考見本類五十一点に所謂「手本」の画一的筆法による整った点画、字形によるものは認められず、墨人会が狙う反筆技偏重の方向を、木子もまた子供への指導の場でも実践しようとしていたと、それは資料※追資四十三、四十九、六十一、六十二、七十三からも認められる。子供向け見本類としての制約はあるが、木子本人の作品化する思想の一端が窺える群である。

図263、264の二点は、「第四期」滑川期、とした時期、昭和三十八年（一九六三）の作品だが、まだ、富山県滑川に至らず、新潟県内野在住期の作品で、まだ機関誌『墨人』上に会友として名だけが残っていた時期の作品である。非文字作品（図264）は、墨人会結成初期の活動の息吹がかるうじて感じられる。一番身近であった草玄に批評を乞うたものであり、同三十六年（一九六一）四月号の『墨人』に『合冊』（第十五号図171）を一時出品しているものの、同三十二年（一九五七）一時離脱してから六年も遠ざかり、墨人会の水準に今の自分が達しているのか忌憚なく語れる草玄の目で批評してもらい、その上で復帰を目指そうとする創立同人としての意地、思いが伝わってくる。

この後、佐渡を離れて十年となった時に草玄に送った写真と作品とが、晩年近くになってしまった作品図265、266であり、再び書に戻ろうとした意向を示す資料と言える。

以上これらの事項、作品、資料等を左記に記し、中村木子像を詳らかにするものとして追加、補完する。

### 中村木子 年譜（補遺）

元号（西暦）

#### 事項

昭和二十四年  
（一九四九）

一月、『蒼穹』第四卷第一号に半紙随意六級と掲載される。<sup>高寄四一</sup>

二月十二日消印、江口草玄に貫名菘翁の臨書を送る。また、『蟬の声』『臨書研究』『書原』誌について購読について尋ねる。<sup>※追資一 現物</sup>

三月、『蒼穹』第四卷第三号に《楽春》が籠字（図187）で初掲載され、鈴木鳴鐸に評される。<sup>高寄四一三</sup>

四月、『蒼穹』第四卷第四号に《温厚》が籠字（図188）で掲載され、鈴木鳴鐸に評される。<sup>高寄四一四</sup>

六月、『蒼穹』第四卷第六号の月例昇級試験結果発表で上級に挙げられる。<sup>高寄四一六</sup>

七月、『蒼穹』第四卷第七号に《聴泉》が籠字（図189）で掲載され、鈴木鳴鐸に評される。また、自運で天部、半紙上級第九楷梯「建中告身帖」、第十楷梯「枯樹賦・哀冊」に名を挙げられる。<sup>高寄四一七</sup>

七月七日消印、江口草玄に上田桑鳩の佐渡行について連絡手紙を送る。<sup>※追資四 現物</sup>

八月、『蒼穹』第四卷第八号に《臨濤》が籠字（図190）で掲載され、鈴木鳴鐸に評される。条幅規定部にまた、月例昇級試験結果で準社友（優級）に挙げられる。<sup>高寄四一八</sup>

九月、『蒼穹』第四卷第九号「八月清書成績表並評」社友・準社友で鈴木鳴鐸に評され、特進する。<sup>高寄四一九</sup>

十月、『蒼穹』第四卷第十号に《蕭颯海樹風》が籠字（図191）で掲載され、鈴木鳴鐸に評される。また、「九月清書成績表並評」社友・準社友で鈴木鳴鐸に評される。<sup>高寄四二一</sup>

無くなつていき、同四十年頃からは、専ら書作品の紹介となつていった。α部は、書の骨格把握のために「書美第三十一号（昭和二十五年十一月号）から設置された研究部。その後、書に益する何かを夫々の見方、仕方の中から掘り出せるものと信じ、あえて本誌に載せることにしました。」森田子龍「編集室」と言う理由で「書美誌」の創刊号に移行するが、区切りとなる二十四回で「公募選評」という保護育成に傾く形での取上げは本誌の性質上、無期限にそれをするには適当ではありませんが、この辺で一応公募を打ち切りたく存じます。」との理由から第三十号（昭和二十八年一月号）で打ち切られる。

（註6）

小、中学生を対象とした墨人会編集の書教育雑誌。昭和二十七年（一九五二）四月一日創刊号発行。墨人会の考えを実践する場として、子供達にも「あてがわれた手本を何も考えず、自分の心にも感じないでただ上手に真似ようとした勉強のしかた等は誤った書の勉強なのです。本當の書の勉強は、書から皆さん自身の心に感ずる美を見出したり、皆さん自身に美と感ずるものを書に表現したりする勉強によつて、皆さん一人一人が人間としての自分自身を自覚して頂くことです。より高い豊かな美しさの書を創造する勉強を通じて、一層高い豊かな人間に育つて下さることです。」としている。昭和三十一年（一九五六）二月号で終刊し、活動を一新し、三月から江口草玄主宰の「ひびき」誌が発行される。

（註7）

「墨友」での活動を一新して昭和三十一年（一九五六）三月から江口草玄の責任で始まった書教育雑誌。手本にこだわらない自由でのびのびとした表現をさせ、子供達の内面を培う指導をした。草玄が昭和五十一年（一九七六）六月に墨人会を脱会するにあたり、墨人会に返上しようとするが、墨人会からの連絡も無く、同年十二月で草玄の編集は終了し、翌号から支部の一人堀尾勝彦が「墨」として継続する。

昭和二十五年  
(一九五〇)

一月、『蒼穹』一月号註。「同人推薦試験成績発表」で優秀につき社友に推薦される。【蒼穹二十五―一】  
二月、『蒼穹』二月号に《端和藝理優》が籠字(図192)で掲載され、鈴木鳴鐸に評される。【蒼穹二十五―二】  
二月十六日から十八日まで、蒼穹会柿岡展が鈴木鳴鐸宅隣接の遊休工場で開催され、条幅、扁額部で推薦となり、社  
同人に推薦される。【蒼穹二十五―三】

三月、『蒼穹』三月号に《春水柳門情》が籠字(図193)で掲載され、鈴木鳴鐸に評される。【蒼穹二十五―三】  
三月十日付で、柿岡蒼穹展での立場について、鈴木鳴鐸に手紙を送った旨、江口草玄に知らせる。【追資十四 現物】  
四月、『蒼穹』四月号に《抱布賈十倍》が籠字(図194)で掲載され、鈴木鳴鐸に評される。また競書で社友筆頭に記さ  
れる。【蒼穹二十五―四】

六月、『蒼穹』六月号に《習静四囲山》が籠字(図195)で掲載され、鈴木鳴鐸に評される。【蒼穹二十五―六】  
七月、『蒼穹』七月号に《移竹喜微陰》が籠字(図196)で掲載され、鈴木鳴鐸に評される。【蒼穹二十五―七】  
七月二十日消印、江口草玄に長鋒大筆の問い合わせをする。【追資十五 現物】

十月、『蒼穹』十月号に「鐘繇宣示帖」と「木簡」の臨書の籠字(図197、198)が見本として掲載される。【蒼穹二十五―十】  
十一月、『蒼穹』十一月号に「木簡」の臨書の籠字(図199)が見本として掲載される。【蒼穹二十五―十一】  
十二月、『蒼穹』十二月号に王羲之草書の臨書の籠字(図200)が見本として掲載される。【蒼穹二十五―十二】

昭和二十六年  
(一九五二)

一月、『蒼穹』一月号に「淮頂記」の臨書の籠字(図201)が見本として掲載される。【蒼穹二十六―一】  
三月十三日付で、江口草玄に『書之美』一部会員推挙の祝文を送る。【追資二十五 現物】  
五月、『書品』第十六号に金子鳴亭「第四回書道芸術院展評」が掲載され、推薦賞の木子の作品を「場中の華」と評す  
る。(図48補遺)【書品十六】

六月、『蒼穹』主宰の鈴木鳴鐸が二月から病床にあり、その療養費のため鳴鐸小品頒布会が催され、その発起人とし  
て江口草玄と共に名を連ねる。【現物】  
七月、『墨美』第二号に五月に制作した《悪魔よこいこいたのしき悪魔よ》(図202)掲載。【墨美―二】  
十月、『墨美』第三号α部に出品(図203)、長谷川三郎に評される。また、第三回毎日書道展出品《良寛詩夢中間答》(図  
60)掲載される。【墨美―三】

十一月十六日、京都墨美発行所での「一九五二年の書道のために」座談会に参加する。【追資二十七 墨美八】  
十二月九日頃、森田子龍の手紙を受け、森田、井上、江口宛に反日展や今後の態度表明等の手紙を送る。【追資二十八 現物】  
十二月二十六日消印で、江口草玄に一月六日まで佐渡を離れられない旨の手紙を送る。【追資二十九 現物】  
十二月三十一日消印で、江口草玄に正月の会合に欠席の電報を送る。【追資三十 現物】

昭和二十七年  
(一九五二)

一月十五日付註で、四日の会合欠席の詫びと機関誌等の意見を墨人会四人に送る。【追資三十一 現物】  
三月十一日付で、東京品川の表具師湯山春峰堂宛に墨人会の行動の真意を伝える手紙を送る。【追資三十五 またそ  
の写しと共に墨人会同人宛に種々の活動での意見手紙を送る。【追資三十六 現物】  
四月、『墨友』創刊号(改題第一号)に四人の子供の評を掲載する。【追資三十九 墨友―一】  
五月、『墨人』五月号に、「作品批評」※追資四十二「習作批評」※追資四十二それぞれで江口草玄を担当する。【墨人二十七―五】『墨

(註8)  
この年から巻号記載が無くなる。

(註9)  
手紙は十五日付だが、封書裏の日付は十六日が記載され  
ている。

友『第五卷第四号に『墨友』の指導方針について三月二十一日に執筆した「墨友教室」を掲載する。 ※追資四十三 三人の子供の評を掲載する。 ※追資四十四 墨友五一四

五月二十六日付で、墨人諸兄宛に種々の意見や宇野雪村批判等の手紙を送る。 ※追資四十五 現物

六月、『墨美』第十三号α部に二点出品(図210、211)、長谷川三郎に評される。 墨美十三 / 『墨友』第五卷第五号に三人の子供の評を掲載する。 ※追資四十六 墨友五十五

七月、『墨美』第十四号α部に四点出品(図212、215)、長谷川三郎に評される。 墨美十四 / 『墨友』第五卷第六号の巻頭

言に墨人会としての『墨友』での姿勢を記す。 ※追資四十九 また、三人の子供の評を掲載する。 ※追資五十 墨友五六 / 故鈴木鳴鐸の遺児のため教育資金協力募集の発起人に江口草玄と共に名を連ねる。 現物

七月二十八日消印で、江口草玄に墨人佐渡会合の予定について明確な説明を求め手紙を送る。 ※追資五十二 現物

九月、『墨友』第五卷第八号に二人の子供の評を掲載する。 ※追資五十三 墨友五十八

十月、『墨友』第五卷第九号に二人の子供の評を掲載する。 ※追資五十四 墨友五十九

十一月、『墨友』第五卷第十号に二人の子供の評を掲載する。 ※追資五十五 墨友六十

十二月、『墨友』第五卷第十一号に二人の子供の評を掲載する。 ※追資五十八 墨友五十一

十二月六日消印で、江口草玄に次女逝去の弔文を送る。 ※追資五十九 現物

昭和二十八年  
(一九五三)

一月、『墨友』第六卷第一号に五人の子供の評を掲載する。 ※追資六十 墨友六一

六月、『墨友』第六卷第六号に「指導される方々に」掲載する。 ※追資六十一 墨友六六 / 『書教育』誌⑩ No.3に「習字教育に関して父兄としてお願い」を両津町教育委員、両津小学校PTA校外指導部長として掲載する。 ※追資六十二 書教育No.3

七月、『墨友』第六卷第七号に二人の子供と四支部の評を掲載する。 ※追資六十三 墨友六七

八月、『墨友』第六卷第八号に二人の子供と二支部の評を掲載する。 ※追資六十四 墨友六八

九月、『墨友』第六卷第九号に二人の子供の評を掲載する。 ※追資六十五 墨友六九

十月、『墨友』第六卷第十号に一人の子供の評を掲載する。 ※追資六十六 墨友七十

十二月、『墨友』第六卷第十二号に三人の子供の評を掲載する。 ※追資六十七 墨友六十二 / また、『書教育』No.8に『墨友』掲載の子供の作品を再掲し、別評を記す。 ※追資六十八 書教育No.8

昭和二十九年  
(一九五四)

五月、『墨友』第七卷第五号に一人の子供の評を掲載する。 ※追資六十九 墨友七五

六月、『墨友』第七卷第六号と『書教育』No.14に「作品のかんしょう」として同文の一人の子供の作品批評を掲載する。

※追資七十 墨友七六・書教育No.14

九月、『墨友』第七卷第九号に「作品の鑑賞」として一人の子供の作品批評を掲載する。 ※追資七十一 墨友七十九

昭和三十年  
(一九五五)

一月、『墨友』第八卷第一号と『書教育』No.20に「かんしょう」として同文の二人の子供の作品批評を掲載する。 ※追資七十二 友八一・書教育No.20

四月、『墨友』第八卷第四号に「——今の子供は字が下手——猿まねと正しい書の目標」を掲載する。 ※追資七十三 墨友八四

(註10)  
墨人会の関谷義通を中心に、書教育の確立推進をはかるために書教育学会が結成され、昭和二十八年(一九五三)四月一日に創刊された研究誌「墨友」による研究をもとに『墨友』編集に活かされた。「墨友」と共に発展解消し、昭和三十一年二月号で終刊。活動を一新し三月から江口草玄主宰の「ひびき」誌が発行される。

昭和三十八年 六月二日付で、江口草玄に作品二点(図262、263)を送る。[現物]  
(二九六三)

昭和三十九年 七月十九日付で、江口草玄に滑川に居を定めた旨の手紙を送る。 ※追資七十六 [現物]  
(二九六四)

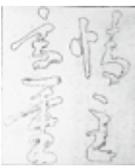
昭和四十七年 四月七日消印で、江口草玄に手紙を送り、作品(図266)を送り、批評を乞う。また手紙の中に「読める文をかき度いが兎に角十年目の書だ」と記す。 ※追資七十九 [現物]  
(二九七二)

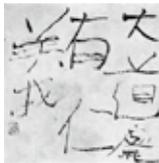
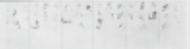
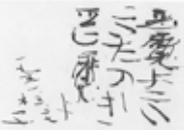
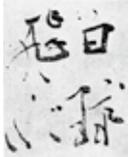
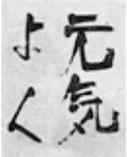
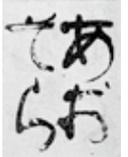
七月十四日消印井上有一の江口草玄宛手紙の中で、木子に相川音頭のことについて尋ねたことと、木子が書に復帰するに  
はどこがいいか聞かれ、「墨人」と答えたことが記される。 ※追資八十 [現物]

作品〈補遺〉

番 号	
図	
画像番号	
作品名 制作年(西暦)	出品展覧会・出典
①寸法／②所蔵／③読み／④木子の言／⑤他者評／⑥その他 ／⑦筆者註	

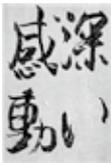
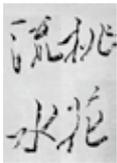
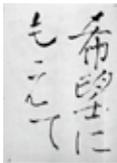
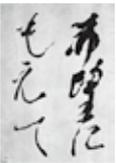
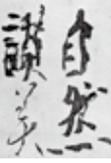
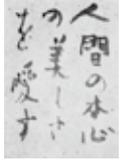
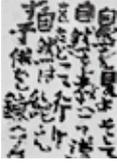
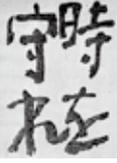
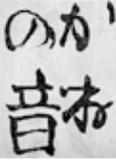
188	187
24-4-2	24-3-1
温厚 昭和二十四年 (一九四九) 『蒼穹』第四卷第四号	楽春 昭和二十四年 (一九四九) 『蒼穹』第四卷第三号
⑤鈴木鳴鐸評「◇木子君 温はよい。和様のはいがして、やわらんでいる。厚は子が動きすぎている。上半の調子を放さなかつたら温とピッタリだと思う。新しみはないが着実。」	⑤鈴木鳴鐸評「◇木子君 よく考えている。書のためのしさを知性的に玩んでいると言へる。いかにも気がきいてスッキリした美男子ぶりだが一寸ひ弱い感じだ。古典の線の内含する一用筆を無視したためだ。」
190	189
24-8-3	24-7-1
臨濤 昭和二十四年 (一九四九) 『蒼穹』第四卷第八号	聴泉 昭和二十四年 (一九四九) 『蒼穹』第四卷第七号
⑤鈴木鳴鐸評「◇木子君 今月のこの線は君独特の一律性がなくてよい。形が小さいため、手癖が表はれなかつたせいでもある。大きさがあつた。」	⑤鈴木鳴鐸評「◇木子君 一頃はやつた青白い思索ばり。どうも苦勞の方向をまらちがえている感じがしてならぬ。」

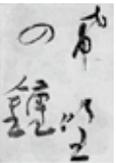
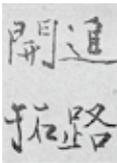
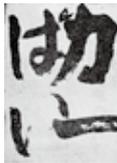
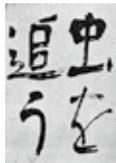
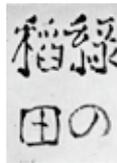
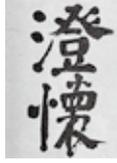
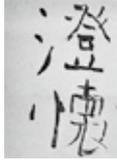
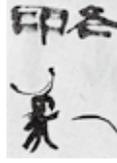
196	195	194	193	192	191
					
25-7-1	25-6-1	25-4-3	25-3-2	25-1-1	24-10-2
移竹喜徴陰 昭和二十五年 (一九五〇) 『蒼穹』七月号	習静四開山 昭和二十五年 (一九五〇) 『蒼穹』六月号	抱布買十倍 昭和二十五年 (一九五〇) 『蒼穹』四月号	春水柳門情 昭和二十五年 (一九五〇) 『蒼穹』三月号	端和藝理優 昭和二十五年 (一九五〇) 『蒼穹』二月号	蕭颯海樹風 昭和二十四年 (一九四九) 『蒼穹』第四卷第十号
⑤鈴木鳴鐸評「木子君 側筆での仕事。濃墨でカスレが多いので、他の三傑位苦労したがうまく出ないか。先月の顔の臨に君がいぬか。」	⑤鈴木鳴鐸評「木子君 書き初めはチヨコチヨコ筆を早く結体を緊密にし、段々筆を緩かに大きく作る手法。それに一工夫ありたし。山字最尤。」	⑤鈴木鳴鐸評「木子君。沢山の作品の中からこれを取る。いづれも、外から掘り下げて行くのでなくて、内からのものを出そうとしている作である。」	⑤鈴木鳴鐸評「○木子君 木簡風に太い豪放な筆行の仕事である。稍々点画の意が軽い感じ。春の末画、曲の部分で筆が全部で働かず、柳の木との画も急にハジキ出し、卵の末画、大きく働いたが押えて開いた線にツボまる力の内含たらず。他は成功。」	⑤鈴木鳴鐸評「木子君、すづまり紙に書いてあつたものを字間を広げて籠にとつたら、ズツと見られる。余白という大切な条件があることがハッキリしたと言つてよい。藝字の云のムがイヤに大きい所に君の意匠があつたと思うが、気にかかつてならない。これは歪みについての私の考え方からのせいかも知らぬ。私は「人は皆強い正しい清い高いものにあこがれを持って、そのあこがれに達するために努力する。然し、表はれたものは皆ゆがみを持つ。」と解する。	⑤鈴木鳴鐸評「○木子君 少し騒がしい。君のも書き出しの蕭字がよい。颯風両字の風構が沈着しない。樹の寸縦画に故意を感じる。海の形の意匠にも不安定がある。一寸腕に任せずきたのだ。／右両君(他一人は川面南帯)の作一脈通するものがある。いづれも賑かに作つて、闊達な自信のある揮毫振り、それが熟練から生れた確かさである。」
48補遺	201	200	199	198	197
					
26-1.28	26-1-3	25-12-1	25-11-4	25-10-5	25-10-4
岑参詩与高適薛稷同登 慈恩寺浮图 昭和二十六年 (一九五二) 『蒼穹』二月号 推薦(賞)	臨空海灌頂記 昭和二十六年 (一九五二) 『蒼穹』二月号	臨王羲之 昭和二十五年 (一九五〇) 『蒼穹』十二月号	臨木簡 昭和二十五年 (一九五〇) 『蒼穹』十一月号	臨木簡 昭和二十五年 (一九五〇) 『蒼穹』十月号	臨鐘繇宣示帖 昭和二十五年 (一九五〇) 『蒼穹』十月号
⑤金子鳴亭「第四回書道芸術院展評・作品評」推薦に於ける席次は下つているが、中村木子と井上有一の二人は場中の華であつた。就中木子の六曲屏風は新清の氣に溢れ、点描の如くあしらつた渴筆の線からかもし出す雰囲気は素晴らしい。大雅堂ほどの筆力は見られず、又良寛ほどの淡雅に倣してないが、この二人の情趣に通うものがある。書品第16号	⑥第三楷第3(随意参考)	⑤鈴木鳴鐸評「ズバリ」と紙を切つて押しすめる気魄を見ねばならぬ。筆先の奏するセンチな情趣を尻目にかけているのである。だから豪石な作風の天来翁に通うものがあり、腕達者な桑鳩兄の作品に似る。こういう気合は単に師弟関係から来るのみでなく、身体的条件にも類似があるようである。ピク／＼書く人には殊によい。」 ⑥随意参考	⑤鈴木鳴鐸評「木簡というものが、まだ世にでなかつた時代、こんなバサけたような作品は見られなかつたに違いない。またみづみづしい、細かな肌理(キメ)のとつた風の書が書家の書と考える人達には今尚邪道と映るに違いない。本誌の長い会員なら木子子のこの種の仕事に馴れて、荒さの底に細かさがあり、錯雑が統一されて居り生(ナメ)のようでは実は熟した作であることを直視しよう。慾を言えば、酔の状態が少し長くつづいてるか?」 ⑥随意参考	⑥特級以上規定	

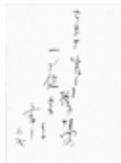
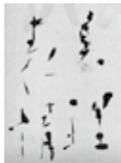
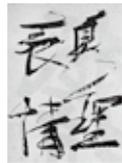
205	204	60補遺	203	55補遺	202
					
27-6-5	27-3-4	26-10	26-10-α	26-7-8-1	26-7-1
<p>大道庵有仁義 昭和二十七年 (一九五二)</p> <p>『墨友』第五卷第五号</p>	<p>(無題) 昭和二十七年 (一九五二)</p> <p>『墨美』第十号・α部</p>	<p>良寛詩夢中間答 昭和二十六年 (一九五二)</p> <p>第三回毎日書道展 『墨美』第六号</p>	<p>(無題) 昭和二十六年 (一九五二)</p> <p>『墨美』第三号・α部</p>	<p>鐘のなる丘 昭和二十六年 (一九五二)</p> <p>第二回書的美巡回展 A賞特選 『書的美』第三十九号</p>	<p>悪魔よこいこいたのし き悪魔よ 昭和二十六年 (一九五二)</p> <p>『墨美』第二号</p>
	<p>⑤長谷川三郎・α部選評「木子氏 柔か味と速度のある鋭い線がかまれたいろいろな形の組合せが美しい。力んたものになじじつくりとした内からの力がある。『墨美』第十号」</p> <p>⑦『墨美』掲載のための版下原稿を木子旧蔵。</p>	<p>⑤比田井南谷「毎日書道展第三部評」中村木子(蛙の笛、和歌) / 洪い線。思い切つた歪みを出しながら、これが趣味にならぬのは筆が沈着しているからであらう。特に前者のナイフツな味は君の独特なものになつてゐる。『墨美』第五号</p>	<p>⑤長谷川三郎・α部選評「すなおな、長い勉強の結果である。『墨美』第三号」</p> <p>⑦甲骨文体の「我」。長谷川の評は、甲骨文であることとを知らずに評しているものと思われる。</p>	<p>⑤阿部展也「前衛書道展雑感——書的美展を観て——」「悪い例とするには力のある書家だけに、お気の毒ではあるが中村木子氏の、鐘のなる丘を参考までに考えてみたい。書がこのように安易な自然主義的な抒情を叙述するかたちとして、様式的には一見新しい見せかけを持ちながら進む方向こそは現在最も警戒せねばならない動きではあるまいか」『墨美』第二号</p>	<p>④最も人間的な、動物的意欲的なものをぶつつけたくなつたのです。『墨美』第二号」</p> <p>⑥一九五二・五・二七 木子</p>
211	210	209	208	207	206
					
27-6-α2	27-6-α1	27-6-9	27-6-8	27-6-7	27-6-6
<p>(無題) 昭和二十七年 (一九五二)</p> <p>『墨美』第十三号・α部</p>	<p>(無題) 昭和二十七年 (一九五二)</p> <p>『墨美』第十三号・α部</p>	<p>真実一路 昭和二十七年 (一九五二)</p> <p>『墨友』第五卷第五号</p>	<p>白球飛ぶ 昭和二十七年 (一九五二)</p> <p>『墨友』第五卷第五号</p>	<p>元氣よく 昭和二十七年 (一九五二)</p> <p>『墨友』第五卷第五号</p>	<p>あおぞら 昭和二十七年 (一九五二)</p> <p>『墨友』第五卷第五号</p>
<p>⑤長谷川三郎・α部選評「線の流暢さと、全体を包むキメの細かい柔か味とは、全く独自のものが近頃出て来た。この様な自己の特質を、自らもシッカリ見きわめて、大きく伸ばしてほしい。『墨美』第十三号</p>	<p>⑤長谷川三郎・α部選評「線の流暢さと、全体を包むキメの細かい柔か味とは、全く独自のものが近頃出て来た。この様な自己の特質を、自らもシッカリ見きわめて、大きく伸ばしてほしい。『墨美』第十三号</p>	<p>⑥書芸科高等コース(隷書と楷書)</p>	<p>⑥書芸科上級コース</p>	<p>⑥書芸科中級コース</p>	<p>⑥書芸科初級コース</p>

217	216	215	214	213	212
27-8-7	27-8-6	27-7-α4	27-7-α3	27-7-α2	27-7-α1
初秋山野 昭和二十七年 (一九五二) 『墨友』第五卷第七号	墨友 昭和二十七年 (一九五二) 『墨友』第五卷第七号	(無題) 昭和二十七年 (一九五二) 『墨美』第十四号…α部	(無題) 昭和二十七年 (一九五二) 『墨美』第十四号…α部	(無題) 昭和二十七年 (一九五二) 『墨美』第十四号…α部	(無題) 昭和二十七年 (一九五二) 『墨美』第十四号…α部
⑥書芸科上級コース参考	⑥『墨友』第五卷第七号表紙題字	⑤長谷川三郎…α部選評「筆が身について来た感じ。作者の 独白が、自然に、見る者に伝つて来る。此の心境的なものに満 れないように……。」墨美第十四号	⑤長谷川三郎…α部選評「筆が身について来た感じ。作者の 独白が、自然に、見る者に伝つて来る。此の心境的なものに満 れないように……。」墨美第十四号	⑤長谷川三郎…α部選評「筆が身について来た感じ。作者の 独白が、自然に、見る者に伝つて来る。此の心境的なものに満 れないように……。」墨美第十四号	⑤長谷川三郎…α部選評「筆が身について来た感じ。作者の 独白が、自然に、見る者に伝つて来る。此の心境的なものに満 れないように……。」墨美第十四号
223	222	221	220	219	218
27-9-6	27-9-5	27-8-11	27-8-10	27-8-9	27-8-8
打った打った ホームラン 昭和二十七年 (一九五二) 『墨友』第五卷第八号	うんどうかい 昭和二十七年 (一九五二) 『墨友』第五卷第八号	雨後の横雲 昭和二十七年 (一九五二) 『墨友』第五卷第七号	雨後の横雲 昭和二十七年 (一九五二) 『墨友』第五卷第七号	雨後の横雲 昭和二十七年 (一九五二) 『墨友』第五卷第七号	雨後の横雲 昭和二十七年 (一九五二) 『墨友』第五卷第七号
⑥中級コース参考	⑥初級コース参考	⑥書芸科高等コース参考	⑥書芸科高等コース参考	⑥書芸科高等コース参考	⑥書芸科高等コース参考

229	228	227	226	225	224
27-12-5	27-11-5	27-11-4	27-10-5	27-10-4	27-9-7
『墨友』第五卷第十一号 (一九五二)	『墨友』第五卷第十号 (一九五二)	『墨友』第五卷第十号 (一九五二)	『墨友』第五卷第九号 (一九五二)	『墨友』第五卷第九号 (一九五二)	『墨友』第五卷第八号 (一九五二)
心に太陽を持ってくちびるに歌を持って 昭和二十七年 (一九五二)	初雪霜柱 昭和二十七年 (一九五二)	霜枯れの道一人行き又一人 昭和二十七年 (一九五二)	いねかり 昭和二十七年 (一九五二)	文化の日 昭和二十七年 (一九五二)	天長地久 昭和二十七年 (一九五二)
⑥第一部上級コース課題参考	④雁塔聖教序を参考にして書きました。墨友第五卷第十号／ ⑥上級コース課題参考	④王羲之黄庭径を参考にして書きました。墨友第五卷第十号／ ⑥高等コース課題参考	⑥初級コース課題参考	⑥中級コース課題参考	⑥高等コース参考
235	234	233	232	231	230
27-C-2	27-12-10	27-12-9	27-12-8	27-12-7	27-12-6
□□のあらし 昭和二十七年 (一九五二)頃	『墨友』第五卷第十一号 (一九五二)	『墨友』第五卷第十一号 (一九五二)	『墨友』第五卷第十一号 (一九五二)	『墨友』第五卷第十一号 (一九五二)	『墨友』第五卷第十一号 (一九五二)
	クリスマス 昭和二十七年 (一九五二)	強い人間 昭和二十七年 (一九五二)	くらいばん雪をとく 半分たべて遠くへほ うった雪が光る 昭和二十七年 (一九五二)	冬の日は遠いよ 山の雪が光るよすぐ暮 れるよ 昭和二十七年 (一九五二)	いかなるときでも自分は 思ふ今一歩いまだ大 事なときだいま一歩 昭和二十七年 (一九五二)
⑦《暴風のばん》(図73)と同構成。 ⑥朱文印・木子 ②個人蔵 ①14.7×34.1cm	②半紙 ⑥第三部初級コース課題参考	②小画箋半分 ⑥第三部上級コース課題参考	②小画箋半分 ⑥第二部中級コース課題参考	②小画箋半分 ⑥第二部上級コース課題参考	②小画箋半分 ⑥第二部高等コース課題参考

241	240	239	238	237	236
					
28-5-6	28-3-5	28-3-4	28-1-5	28-1-4	28-1-3
『墨友』第六卷第五号 昭和二十八年 (一九五三)	『墨友』第六卷第三号 昭和二十八年 (一九五三)	『墨友』第六卷第三号 昭和二十八年 (一九五三)	『墨友』第六卷第一号 昭和二十八年 (一九五三)	『墨友』第六卷第一号 昭和二十八年 (一九五三)	『墨友』第六卷第一号 昭和二十八年 (一九五三)
⑥練習手本	⑥小四課題臨書参考	⑥中二課題臨書参考		⑥上級コース課題参考	⑥表紙掲載
247	246	245	244	243	242
					
28-9-6	28-9-5	28-7-3	28-6-4	28-6-3	28-5-7
『墨友』第六卷第九号 昭和二十八年 (一九五三)	『墨友』第六卷第九号 昭和二十八年 (一九五三)	『墨友』第六卷第七号 昭和二十八年 (一九五三)	『墨友』第六卷第六号 昭和二十八年 (一九五三)	『墨友』第六卷第六号 昭和二十八年 (一九五三)	『墨友』第六卷第五号 昭和二十八年 (一九五三)
		⑥参考作品			⑥練習手本

253	252	251	250	249	248
					
29-1-6	29-1-5	28-9-10	28-9-9	28-9-8	28-9-7
希望の鐘 昭和二十九年 (一九五四) 『墨友』第七卷第一号	進路開拓 昭和二十九年 (一九五四) 『墨友』第七卷第一号	力一ばい 昭和二十八年 (一九五三) 『墨友』第六卷第九号	虫を追う 昭和二十八年 (一九五三) 『墨友』第六卷第九号	緑の稲田 昭和二十八年 (一九五三) 『墨友』第六卷第九号	大運動会 昭和二十八年 (一九五三) 『墨友』第六卷第九号
259	258	257	256	255	254
					
31-8-1	31-4-2	31-4-1	29-2-5	29-2-4	29-1-7
夏の生活 昭和三十一年 (一九五六) 『ひびき』改題第六号 (第九卷第八号)	澄懐 昭和三十一年 (一九五六) 『ひびき』改題第二号 (第九卷第四号)	澄懐 昭和三十一年 (一九五六) 『ひびき』改題第二号 (第九卷第四号)	竹馬 昭和二十九年 (一九五四) 『墨友』第七卷第二号	冬の印象 昭和二十九年 (一九五四) 『墨友』第七卷第二号	流れる光 昭和二十九年 (一九五四) 『墨友』第七卷第一号

			
<p>38-6-1</p>	<p>31-9-2</p>	<p>31-9-1</p>	<p>31-8-2</p>
<p>ちまき喰して柵か場の 一夜今に有り 昭和三十八年 (一九六三)</p>	<p>真理表情 昭和三十一年 (一九五〇)</p> <p>「ひびき」改題第七号 (第九卷第九号)</p>	<p>真理表情 昭和三十一年 (一九五〇)</p> <p>「ひびき」改題第七号 (第九卷第九号)</p>	<p>飛瀑林中雨斜陽山半晴 昭和三十一年 (一九五〇)</p> <p>「ひびき」改題第六号 (第九卷第八号)</p>
<p>② 33.4 × 24.4 cm (半紙) / ③ 個人蔵 / ⑥ 落款・木子(印なし) / 「昭和三十八年六月二日付大愚木子拜」 の裏書き(新潟市内野町山佐水産加工所封筒)で所有者宛に他 一点(図264)と共に送付。現物</p>			
			
<p>47-4-1</p>	<p>46-C-1</p>	<p>38-6-2</p>	
<p>「聖無動尊大威怒王秘 密陀羅尼教」より 昭和四十七年 (一九七二)</p> <p>① 45.4 × 69.5 cm / ② 個人蔵 / ④ こんなしか書けぬ 恥しいが一度見て批判してくれ 読 める文をかき度いが宛に角十年目の書だ たのむよ かしこ 現物 / ⑥ 落款・木子 / 落款印・朱文(ぼく子)</p>	<p>神徳無量 昭和四十六年 (一九七二)頃</p> <p>④ 個展作品です 御笑覧下さい 昭和四十七年四月七日消印手紙封入 写真裏面 /</p>	<p>(不明) 昭和三十八年 (一九六三)</p> <p>② 24.4 × 33.4 cm (半紙) / ③ 個人蔵 / ⑥ 左下に「Bokuzi」署名 / 「昭和三十八年六月二日付大愚木子 拜」の裏書き(新潟市内野町山佐水産加工所封筒)で所有者宛 に他一点(図263)と共に送付。現物</p>	

### 終わりに

第十五号の拙稿により中村木子の生涯と作品を一つに繋ぐことができたが、今回の補遺により、木子像をより明瞭化することができた。また、草玄との結びつきの強さも確認できたことなど、波乱の生涯の中での理想に燃えた熱量の大きさを感じ取ることができた。多方面での木子像を膨らませることができ、より中村木子に一步近づけることができたと思われる。

最後に、本稿執筆にあたり、資料提供等をいただいた関係各位に厚く御礼申し上げますとともに、多大な御協力をいただいた江口草玄氏が、平成三十年十一月十六日御逝去されましたこと、心よりお悔やみを申し上げ、謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

(新潟県立近代美術館 専門学芸員)

【参考文献】

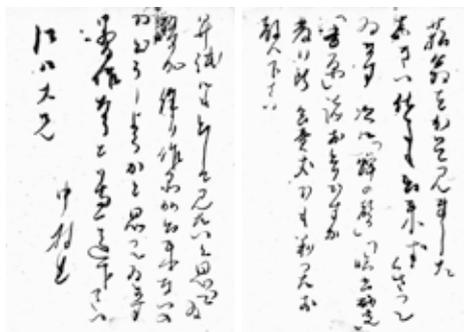
- ・『蒼穹(碧樹)』創刊号〜二十六年一月号 碧樹書社(青郷書院) 昭和二十一年(一九四六)七月五日〜昭和二十六年(一九五二)一月五日
- ・『墨友』創刊号〜三十一年二月号 書道出版社 昭和二十七年(一九五二)四月一日〜昭和三十一年(一九五六)二月一日
- ・『ひびき』No.1〜No.250 ひびきの会(日本書道学会) 昭和三十一年(一九五六)二月一日〜昭和五十一年(一九七六)十二月一日
- ・『書教育』No.1〜No.32 書道出版社 昭和二十八年(一九五三)四月一日〜昭和三十一年(一九五六)二月一日
- ・小林放牛「鳴鐸先生の遺稿について」／中井史朗「書人鈴木鳴鐸のこと」『研究集録』No.9 独立書人団事務局 昭和六十三年(一九八八)十一月二十七日
- ・江口草玄「鈴木鳴鐸に思う」『墨』94号 芸術新聞社 平成四年(一九九二)二月二十一日
- ・『白寿』江口草玄のすべて』図録 新潟県立近代美術館 平成三十年(二〇一八)五月二十六日

【資料】(補遺) 第十五号同様改行／で示す。読点で続いている箇所は、読点を句点に筆者改変あり。

※追資一 昭和二十四年(一九四九)二月十二日消印 中村木子、江口草玄宛手紙 半紙1/4二枚 墨 図版1

(封筒表) 新潟県柏崎市橋場／ 江口草玄様／  
(封筒裏) 佐渡両津湊／ 中村木子／

(手紙) 崧翁をかいて見ました／大きい仕事も出来ずくさつてゐます 次に「蟬の声」「臨書研究」「書原」誌おとりですか／発行所 会費丈でも判つた(ら)お教へ下さい／昇試にも出して見たいと思つてゐますが余り作品が出来ないのでどうしようかと思つてゐます／御習作なりと御恵送下さい／  
中村生／江口大兄



図版1

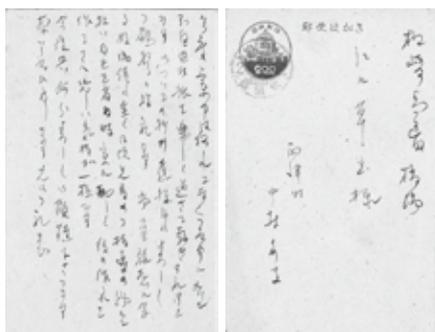
※追資二 昭和二十四年(一九四九)二月十二日消印 中村木子手紙封筒裏への江口草玄書き込み

手なれた、大分安心した書振りだから楽しんで見る事は出来る／然し背後上田先生

が居られる事があまりにもはつきりわかり過ぎる。タンレン期の材にはもつとく苦んで自分の像を追求すべきではなからうか。

※追資三 昭和二十四年(一九四九)(三月?)二十二日消印 中村木子、江口草玄宛手紙 ペン 図版2

(表) 柏崎局区内橋場／ 江口草玄様／両津町／  
(裏) 今度上京中は何これとなく御厄介に想ひ不自由な旅を楽しく過ぎて戴き御礼申上ます御ついで折井遠様にもよろしく御鶴声の程願ます 尚小生予想に余る好成绩も全く日頃兄等の御指導の賜にて拙い自己を省る時実に恥しく後の作品を作るさへ恐しい気持が一極です／今後共何分よろしく御鞭撻下さいます様御願ひ致します先は御礼まで

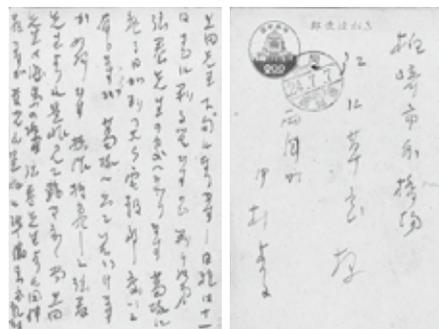


図版2

追資四 昭和二十四年(一九四九)七月七日消印 中村木子、江口草玄宛手紙 ペン 図版3

(表) 柏崎市外橋場／ 江口草玄様／ 両津町／ 中村木子／

(裏) 上田先生下旬になりますー日程は十一日まで判る筈ですので判り次第弦巻先生の処へ参ります葛塚に参る日が判つたら電報致し度いと存じますが葛塚へ出ていたゞけますか如何です拙作特願して弦巻先生よりも是非見て戴き度く尚上田先生御渡島の際は弦巻先生よりも同伴願います貴兄も是非に準備よろ敷願います



図版3

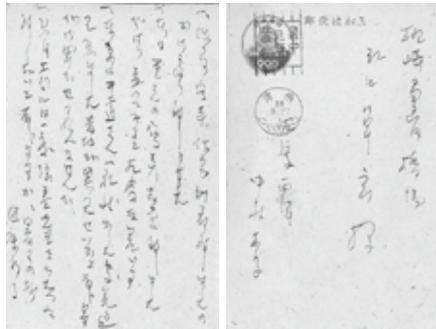
※追資五 昭和二十四年(一九四九)八月五日発行 『蒼穹』第四卷第八号 月例昇級試験結果・鈴木鳴鐸評・準社友(優級)中村木子

○木子君 稍観念的で万碑一様の風があるが暢快。臨書は何をすることかについて考えを聞きたし。

※追資六 昭和二十四年(一九四九)八月二十七日消印 中村木子、江口草玄宛手紙 ペン 図版4

(表) 柏崎局区内橋場／ 江口草玄様／ 佐渡両津／ 中村木子／

(裏) 一、作品の写真作品到着致しましたので御送り致しました／一、本日貴兄の写真拝写致しました／やはり並へてみると相当な差です／一、東京の井遠さんへ礼状出した処差返つて来ました番地が異つたせいかと存じますが御聞かせ願へませんか／一、来月上旬には一度弦巻先生を御たつね致したいと存じますか、暑さの折健康祈る



図版4

※追資七 昭和二十四年(一九四九)九月五日発行 『蒼穹』第四卷第九号 鈴木鳴鐸評 社友・準社友 中村木子 特進。特選へ。毎日展以来の君の線の素朴と謙虚さを喜ぶ。「古典を創作への足掛」とするにはまだ合はぬ。

※追資八 昭和二十四年(一九四九)九月五日発行 『蒼穹』第四卷第九号 鈴木鳴鐸評 条幅部自運 中村木子

○木子君 器用なものだ。大同及毎日展の桑原兄の調子をスツカリこなしている。とに角快作である。

※追資九 昭和二十四年(一九四九)十月五日発行 『蒼穹』第四卷第十号 鈴木鳴鐸評 社友・準社友 中村木子

今少し観念的な所から解放されたら、君の眼の輝が増そうと思う。大まかなよさが特徴だ。

※追資十 昭和二十四年(一九四九)十月五日発行 『蒼穹』第四卷第九号 鈴木鳴鐸評 条幅部自運 中村木子

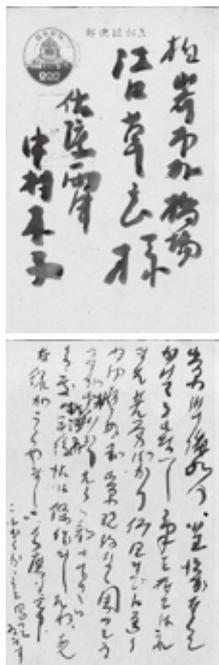
○木子君 桑鳩兄風小さけれども茂質を見る。

※追資十一 昭和二十五年(一九五〇)一月五日発行 『蒼穹』一月号 鈴木鳴鐸「同人推薦試験成績発表表」

○成績表で見る通り一般に臨書がよく、自運が落ちている。反対なのは木子君一人、こんな筈はないのだが病氣の後で精を専らにすることが出来なかつたせいに違いな。兎に角自運は臨書におかれて伸びて行くのであるが、一般にこの力を養う必要がある。

※追資十二 昭和二十五年(一九五〇)か一月三十一日消印 中村木子、江口草玄宛手紙 紙 墨 図版5

(表) 柏崎市外橋場／ 江口草玄様／ 佐渡両津／ 中村木子／



図版5

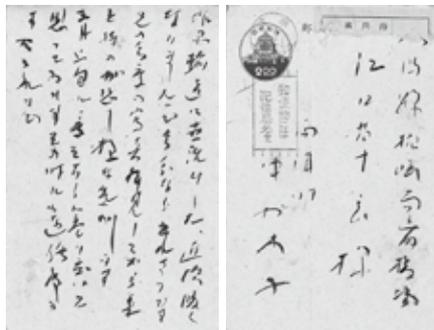
(裏) 出品準備如何、小生忙がしくてかけさうもないし筆を持てはこれまた苦勞ばかり何日までに送らねばならぬのが出品規約なく困つてゐますが御判でしたら御知らせ下さい／今度の平復帖は傑作でしたね、あんな線がうらやましい、今磨墨中／これからかこうと思つてゐます

※追資十三 (昭和二十五年(一九五〇)か)二月二十七日消印 中村木子、江口草玄宛手紙 墨 図版6

(表) 新潟県柏崎局区内橋場／江口草玄様／両津町／中村木子／  
(裏) 作品輸送に世話でした、近頃暖くなりましたので今分なら出れさうです／兄の今度の写真拝見してから筆を持つのが恐し様な気がします／三月上旬に一度そちらに参り度いと思つてゐますその時に御連絡致します右これまで

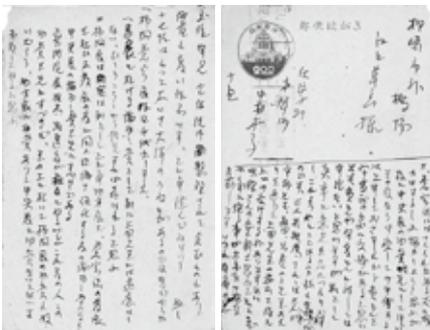
※追資十四 (昭和二十五年(一九五〇)か)三月十日付 図版7

(表) 柏崎市外橋場／江口草玄様／佐渡郡両津町／中村木子／十日／  
(裏) 一、玉作拝見 全体統御整理されて含むものもあり響も高い作品です、とに角澄んでゐます然し十七帖はもつと大いき大洋のうねりがあるのではないでせうか／一、柿岡蒼穹展昨日手紙出しました。／一、書展に於ける論功々賞として別に上田先生には遠慮はしない。むしろこちらから報告すれば喜はれると思ふ／二、柿岡展は閑客は別としてとに角地方展だ。蒼穹誌の発展を願ひ又発展の為に同人組織を強化する為の論功々賞なら中央展の論功々賞を先にすべきである／芸術院展推薦選者が社友にゐる以上これ等の人の功賞を先にすべきだ。その上に於いて柿



図版6

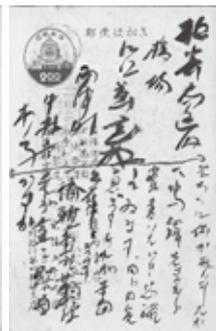
中村木子、江口草玄宛手紙 へ 図版7



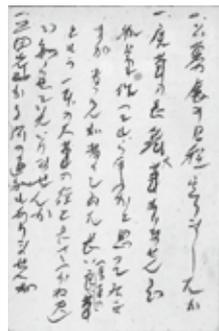
岡展の功賞も好いだらう。地方展に功賞ありて中央展に功賞ないとは一寸矛盾してゐると思ふ／(表面)三、蒼穹誌にはいくらも出来る丈の協力はするし又協力しようと思ふが故に中央展の功賞を先にしてほしい／その後なら御受して御手伝する以上申しておきましたから貴兄と宇高氏の処へ交渉があると思ひます、貴兄や宇高兄に対しては申訳ないと思ひますが私として真率に意見をのべたつもりですしこれより他には申す方法もなかつたのです。三人共推薦されしは三人で宇野先生、森田、弦巻の三先生あたりを通じて上田先生の裁可を得た上で御受けする外ありますまい／鳴鐸さんの童顔を思ふとそこまでやらずに絶る事が出来ない様な気がしますいづれ拝眉の上

※追資十五 昭和二十五年(一九五〇)七月二十日消印 中村木子、江口草玄宛手紙 墨 図版8

(表) 柏崎局区内橋場／江口草玄様／両津町／中村木子／  
(裏) 一、公募展の日程定まりましたか／一、唐筆の長鋒大筆ありませんので私筆作つてもらはしつかと思つて居ますが貴兄が持つてゐた長い唐筆の良い筆ともう一本の大筆の径と長さ(かね尺)で知らせていたゞけませんか／一、上田先生から何の通知もありませんが(表面)そちらに何かありましたか／一、鳴鐸先生から葉書いたゞき恐縮してゐます、同じ内容と思ひますあれが本当と存します／一、清雅堂の筆は毛が全々駄目ですか



図版8



※追資十六 昭和二十五年(一九五〇)七月三十一日消印 中村木子、江口草玄宛手紙 墨 図版9

(表) 柏崎局区内橋場／江口草玄様／佐渡両津／中村木子  
(裏) 拝啓御手紙拝見 九日朝出發したと思ふつてゐますが御都合如何／都合つ

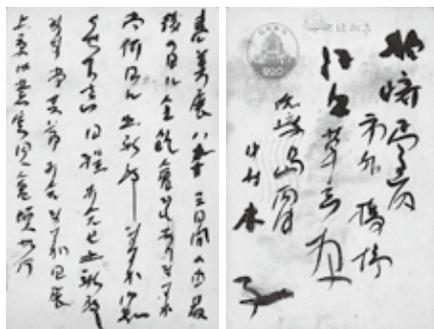


図版9

かねば小生四日の夜深にて五日朝八在にしてもよいが七八日は家に用事がある為ゆつくり出来ず出来れば九日朝発にし度い。七日兄より出てもらつて佐渡まで来ていたゞけは一番よいが何とかしていたゞけまいか

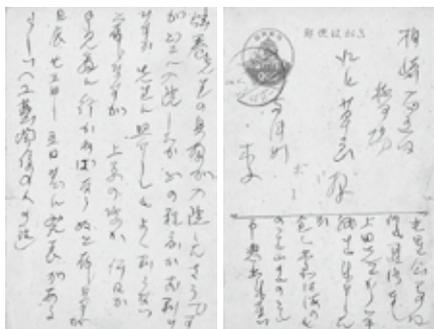
※追資十七 昭和二十五年(一九五〇)十月六日消印 中村木子、江口草玄宛手紙 墨 図版10

(表) 柏崎局区内市外橋場 / 江口草玄様 / 佐渡島 両津 / 中村木子 / (裏) 書美展八九十 三日間の由最後の日に金鈴会でもありますか / 尚何日に出新致しますか御知らせ下さい日程打合せ出新致します尚其節打合ます 即日展上京は蒼穹同人会頃如何



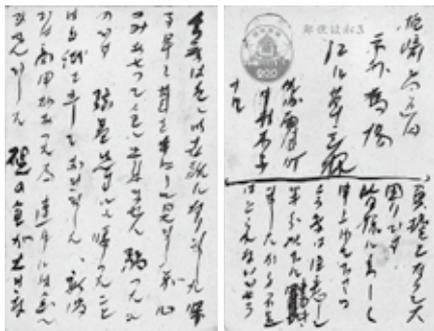
※追資十八 昭和二十五年(一九五〇)十月二十二日消印 中村木子、江口草玄宛手紙 墨 図版11

(表) 柏崎局区内橋場 / 江口草玄様 / 両津町 / 木子 / (裏) 弦巻先生の奥様が入院したさうですがどこへ入院したかどの程度かお判りですか先生に紹介してもよく判らないと存じますが上京の際か何日か御見舞に行かねばならぬと存じますが日展二十三日―五日までに発表があるらしい(工芸関係の人の話) / (表面) 圭星会その件何も連絡なし / 上田先生から手紙でも来ましたか / 全く出品は海のものとも山のものとも予想出来ない



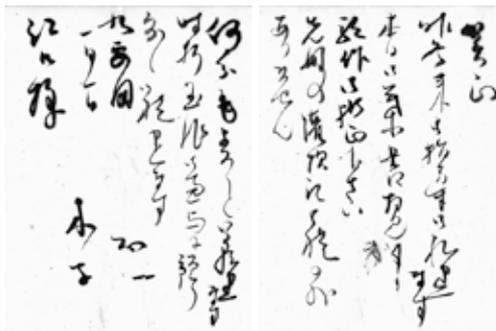
※追資十九 (昭和二十五年(一九五〇)か)十一月十日付 中村木子、江口草玄宛手紙 墨 図版12

(表) 柏崎局区内市外橋場 / 江口草玄様 / 佐渡島 両津 / 中村木子 / 十日 / (裏) 今度は色々御世話になりました帰る早々筆を手にして見ましたが心のみあせて全々出来ません弱つたものです / 弦巻先生にも帰つたことは手紙を出しておきました。新潟では商用があつた為連中には会ひませんでした 硯の金が大きなの(表面) 負担となつて大困りです / 皆様によりしく申上げて下さい / 今度は注意して半分以下に書きましたから不足はとられないでせう



※追資二十 (昭和二十六年(一九五二)か)一月一日付 中村木子、江口草玄宛手紙 墨 図版13

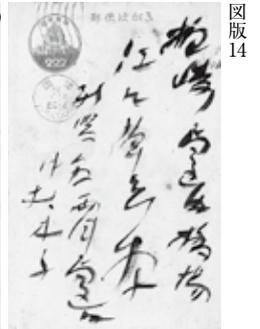
薄紙二枚 図版13 (封筒表) □□局区内 / 柏崎市橋場 / 江口草玄様 / (封筒裏) 両津湊一四 / 中村木子 / (手紙) 賀正 / 昨冬来御指導御礼申上ます / 本日御葉書拝見 / 駄作御批正下さい / 先般の灌頂記御礼の外ありません / 何分もよろしく御願申上ます / 時折玉作御恵与に預り / 難申上ます / 右要用 不一 / 一月一日 / 木子 / 江口様



※追資二十一 昭和二十六年(一九五二)一月十六日消印 中村木子、江口草玄宛手紙 墨 図版14

(表) 柏崎局区内橋場 / 江口草玄様 / 新潟県両津局区内 / 中村木子

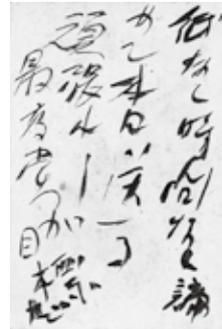
(裏) 紙なく時間なく諦めて本日送る／頑張れ！／最高賞が目標だ



図版14

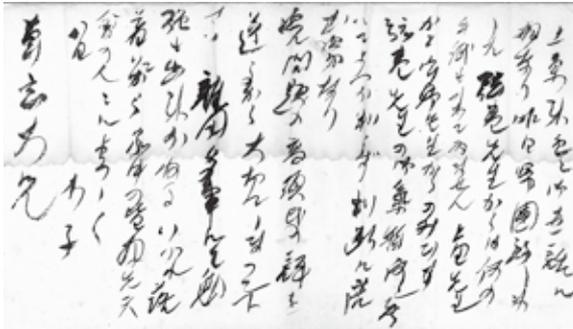
※追資二十二 (昭和二十六年(一九五二)か)二月八日付 中村木子、江口草玄宛手紙

墨 図版15



図版15

(封筒表) 新潟県柏崎局区内橋場／ 江口草玄様／  
 (封筒裏) 佐渡郡両津町／ 中村木子拜／  
 (手紙) 上京来色々御世話に相なり昨日帰国致しました弦巻先生からは何の手紙も来ておません上田先生かと宇野先生からのみです／弦巻先生の御氣持何と考へてよいか判らず判断に苦しむ次第なり／次に問題の高須氏の評を送るから大切にしまつて下さい 雑田多事にて勉強も出来かねる いづれ落着いてから家中の皆様先天会の人々によるし／八日 木子／草玄大兄



※追資二十三 昭和二十六年(一九五二)二月二十五日付 中村木子、江口草玄宛手紙

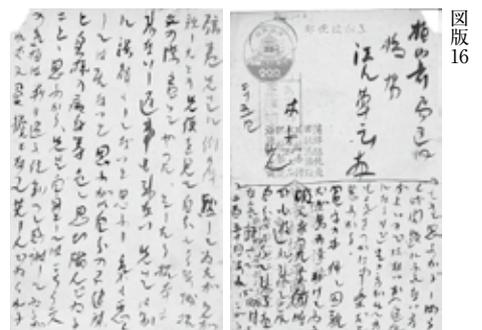
墨 図版16

(表) 柏崎局区内橋場／ 江口草玄様／木子山人／二十五日／

(裏) 弦巻先生に例の件黙してゐたが兄が話したとの先便を見て自分も多賀城拓文の際書いてやつた。そしたら拓本も来ないし返事も来ない 先生は別に誤解もしてないと思ふし氣も悪くしては居ないと思ふが自分の不健康と奥様の病身等色々思ひ悩んでゐること、思ふから、先生自身としてはこちら二人の氣持は判り過ぎる位判つて感謝してゐるが□れ丈又負担となつて苦しんでゐられる／(表面)ものと思ふからしばらく此問題にふれない方がよいのではないか(健康になるまで)その方が先方も氣をつかはす楽だと思ふから。／習字の本仲々困難だが馬力をかけてゐる／暇になつたら何時でも遊に来てくれ／ 自分の家へ来る様な氣軽さで 両津迄二百五十円あればこれ

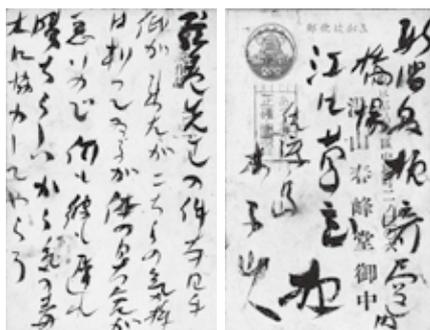
※追資二十四 昭和二十六年(一九五二)三月八日消印

図版17



図版16

(表) 新潟県柏崎局区内橋場／ 江口草玄様／佐渡島／ 木子山人／  
 (裏) 弦巻先生の件本日手紙が来たがこちらの氣持は判つてゐるが体の具合が悪いので何も彼も遅れ勝ちらしいから氣の毒／大に協力してやらう



図版17

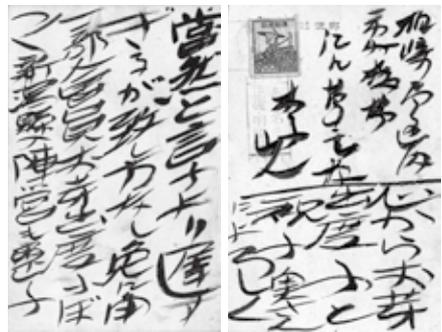
※追資二十五 昭和二十六年(一九五二)三月十三日付 中村木子、江口草玄宛手紙

墨 図版18

(表) 柏崎局区内市外橋場／ 江口草玄様／ 木子山人／  
 (裏) 当然と言ふより遅すぎるが致し方なし兎に角一部会員お芽出度ふぼつ／新

湯原の陣営も整ふ／(表面)心からお芽出度ふと祝ふ奥さんよろしく

図版18



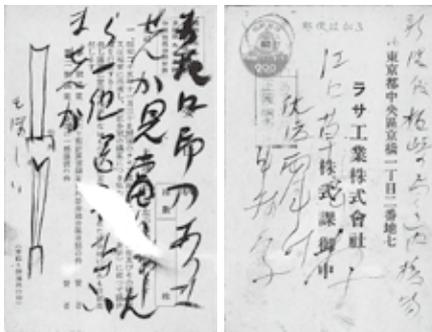
※追資二十六 昭和二十六年(一九五二)三月十六日消印

墨 図版19

中村木子、江口草玄宛手紙

図版19

(表)新潟県柏崎局区内橋場／江口草玄様／佐渡両津町／中村木子／  
(裏)貴地に印刀ありませんか見当りましたら一但送<sub>り</sub>下<sub>さ</sub>いませんか／(図二点)もほしい



※追資二十七 昭和二十六年(一九五二)十一月十六日 「一九五二年の書道のために」座談会 (二十七年一月一日発行『墨美』第八号)

(前略)／有田 展覧会に対して、是非何とかしなければならぬと、痛切に感じ、他の方々と話された様なことがあればどうぞ…。／中村 端的に言うると、書家はテクニクはわかるが美がわからぬ。他の美術界から馬鹿にされたのは美にぶいからだ。芸術である以上、美が分らぬでは問題にならぬ。指導者のあやまれる書の考え方を反

省してもらいたいね。／有田 書道界の先輩としての審査員が、新しく書を発展させようと言う考えが足らぬという意味ですね。／中村 そうなんです。あの人達が何を考えているのかわからぬ。／江口 第三部を別に設けて特別扱いするのがおかしいのではないかと思いますね。／有田 江口さんは三部の作品が当然、現代の書であるべきなのに、特別にわけて、しかも三部にしたのがおかしいという意味ですか。／江口 はつきりいうと、作品でない作品らしきものが第一部には多いのではないでせうか。美としてみた場合に。／辻 小学校の習字になると何か基礎的なものがあるのではないか、とは思いますが、戦前の画一的なあの手本や、その様な形のものに基礎があるのではない。しかるにその上に書があるとまた世間や教育者が考える。そこに誤解がある。第一部の人たちは、矛盾した考えから脱け出られないのではないか。／有田 第三部の問題、観覧者に与える影響から、一緒にしないと具合がわるいのですか。／中村 第一部、第三部とすると、第一部が常道で、第三部は新しいものを取りあげてやるのだと見られ易い。三部の名の故に、借家の様に感じる。／有田 一部だけが伝統を重んじて正しいのだと誤解される。だから、三部も一部も一緒にする御意見が多いですね。長谷川先生どうでしたか？御覧になりました感じ…。(中略)／有田 日展の反省、日展に書道が入つて以来の感想を述べていただきますか。／中村 日展の運営や審査のいい、悪いは別として、書道の参加は、一応書道界のプラスになった。／書道を一般がみとめ、書道界自体も芸術するんだという自覚をもつた。今までは守りたてるといふことが大切であつた。今日のところは殆どが伝統墨守以上に出ていないから、それならそれでハッキリした輪廓があつた方がよい。そうすれば対立するものと相剋し発展の機会ともなるでしょう。今の様な性格もはつきりしない日展に、入選だけが魅力で、入選の為に自分の真理にそむいた、甘いものを作る様な状態では書道界に大きなマイナスである。／関谷 日展の審査員といわれる程なら、新旧いづれか問わずみてる期待を持つていたのですが…。／審査員が古典の本当の美しさを知つていないなら新しいものも分りそうなものと思つていた。素直な気持でみてくれたかを疑うね。／有田 日展運営の人達が指導的立場から、大きな態度で動いてくれなければならぬ、この点に批判されるべきものがあるという意味ですね。／中村 関谷さんがいわれたように、現代の書、子供の書、これらの書に対する批判が出来ない様なら古典も分つてはいない。古典を偶像化して有難つてに過ぎないんだね。／関谷 結局新しいものがわからぬものなら、古典もわからぬ。古典尊重は型でなく創造されてこそ意義があるのだ。古典そのまま作つた様なものは否定するべきが本当だ。／有田 書道界では芸術における古典や伝統が正しく理解されず、又、芸術家としての生活態度が出来ていないからですね。／中村 人間的な良識に於て批判されるべきだ。彼等は子供は永久に子供、大人ははじめから大人だと思つているんだね。／関谷 芸術院会員が日展を運営している様ですが芸術院会員

はその様なものとして、推薦されたものだろうか。／辻 芸術院を作つたのと、後でそれに日展をくつつけたところに矛盾があるんですね。／中村 書が日展に加つて、数年やつて見たことによつて古典派から対立しなければならぬという芸術意識をもつてきたことは有難い。落選しても甘んじて、喜んで受けられる。／関谷 今年の日展の性格がはつきりしたから、楽だつたんだ。初めから落選のつもりで妥協した書き方をしなかつた。／中村 日展に入つて以来よくなることと期待して協力して来たが、今年の審査のように露骨に表られると、予想以上に悪くなつたという感を深くするね。／(中略)／長谷川 抽象画の場合は一応決定して存在しているつもりで私はやつている。その前は絵であるという以上は描写がなければならぬということはいつも聞いた。そしていつも否定しつづけて今日来ています。——先日も或る会合の席で華道家の小原豊雲氏が隣席にいて、「私達のやつていることに、いつも文句が出ますが、花というから文句が出るので、何かいい名前はないものではないか」という話です。「書の方にはα部というのがありますよ」と答えておきました。「そらはいいことを聞いた」といつていましたよ。／中村 生花では花が主、花器が従ですね。今は器に添えものの花もありますね。／長谷川 絵画・書・花、みな難しいところに逢着していますね。(中略)／関谷 技術教育面は教えることは少い。発見させ創造させることを主とせねば——。／中村 展覧会をみても、今年は技術教育であつた。書道界全体がそれに縛られている。／辻 用という立場に立つた教育の態度も、はつきりさすと、わかりやすいのではないか。用は環境を伴つたもの、これに即する字が必要になる。用の転換がある。／関谷 元にもどして社会を見て、そこから初めないとはいまらぬ。今までのことはやるだけ役に立たなくなる。毛筆の用の面は特に變つてきている。その場に應じて物を考える訓練をすることが大切だ。／辻 本当の意味での美がわからぬと実用にもならぬ。／関谷 それには書の要素を考えないと出来ない。／中村 筆を支える力、速さの外に技術的なものはないね。／(後略)

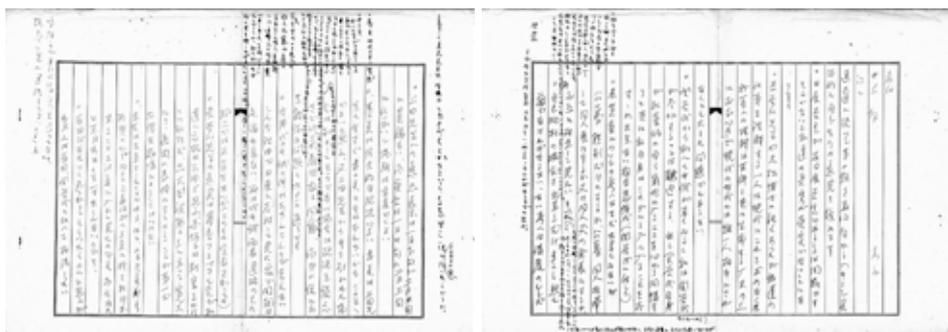
※追記二十八 昭和二十六年(一九五二)十二月九日頃 カーボン複写二枚原稿用紙 図版20  
(草玄書き込みあり省略)

森田／井上／江口／様／速達に続いて第二報を森田様から入手して具体的に自分なりの意見を纏めます。○日展否定が反日展であることは同感ですそれでない私達の真実が真実でないことになりませぬ。○長谷川先生や久松博士の話もあつたが我達の仕事を理解する一人は現代にこれを求めなく共我等への理解は芸術と真に生命する歴史の上に求むべきで現代の世代には誰一人相手にされなくとも大した問題でもあるまい。○関谷氏から私へも手紙が来てゐるし私は関谷氏が参加することは歓迎する。但し関谷氏自身が社会的に自ら窮地に入ることを心から同情すると共に私自身はこのグループに入ることをおす、め出来ない様な気持だ。(関谷氏に対して)

／○展覧会についての考へはまだ出来てゐないが公募鑑別だけにするか、公募同人推挙して同人展にするか又は同人丈の発表にするか、お互に研究して見たい。○自己批判の機会を出来るだけ多くして然も厳でなければならぬ。甘い考へは惰落のもとだ。○上田先生への意志表示は一月下旬が二月上旬に異議ない。尚会合は一月中旬か二月上旬に仕度いし場所は東京でもよい。○墨美は総合的な現況でよい。書美は上田先生も今すぐ書の美と手は切れないからこのまゝ、でよいと思ふ。又上田先生から手を引かれた場合は別としてもそうでない場合は現況を続くべきで此点森田様と同感。尚第二信にある雑誌の問題も以上の通りです。○宇野氏の手紙の件はあきれてものが言えない。こんな理由で日展に反対して見た処で同調は無論出来ぬ。或は此手紙両者連絡の上の細々では在りますまいか(こちらの空気を知つての)／○長谷川先生の意見は尊重さるべきものだが私達に妥協は不用と思ふ、妥協とは利害をかけての取引だ、只大きな視野の上に立つて寛大に?無凝の気持になりきることが第一だ。安価な感情によることはいけない。○会合は東京としたことは井上、江口、小生共京都より経費のかからぬことと森田氏も上京の折を利用出来ることを計算に入れて見たのです。尚今月末と来月末は小生一寸出られないのです。○有田氏あたりも参加してもらつたらよいと思ふが出来れば有田、関谷氏も加へて相談したい

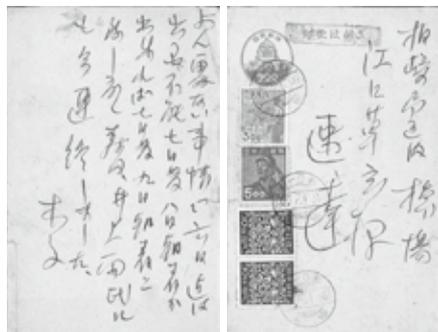
※追記二十九 昭和二十六年(一九五二)十二月二十六日消印 中村木子、江口草玄宛速達手紙 ペン 図版21

(表) 柏崎局区内橋場／江口草玄様／  
(裏) よん処ない事情で六日迄は出国不能七日発八日到着が出来れば七日発九日到着と致し度く森田、井上両氏にも今連絡しました。／ 木子



図版20

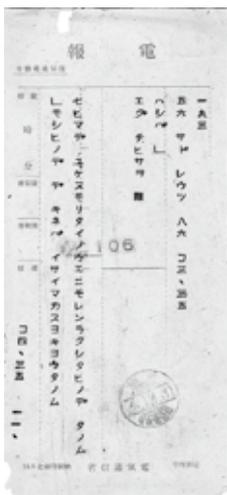
図版21



昭和二十六年(一九五二)十二月三十一日消印 中村木子、江口草玄宛電報

※追資三十  
一九三〇/五六 サド レウツ 八六  
コ三、三五/ハシバ」/エグ チ  
ヒサヲ 殿/七ヒマデ ユケヌモリ  
タイノウエニモレンラクシタヒノデ  
タノム」モシヒノデ デ キネバ  
イサイマカスヨキヨウタノム/コ  
四、三五 一一、

図版22



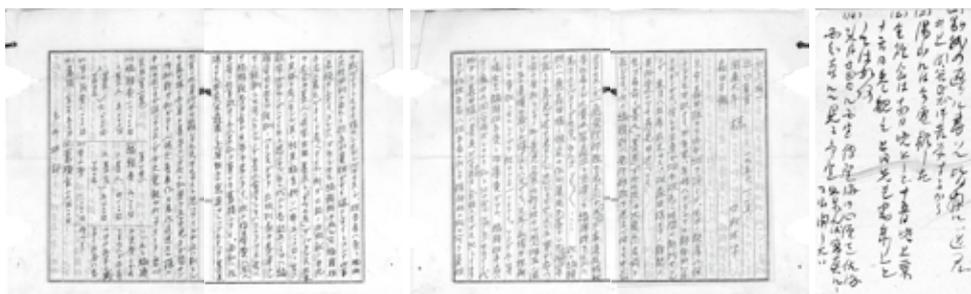
※追資三十一 昭和二十七年(一九五二)一月十五日付(封筒裏は十六日付) 中村木子、江口草玄宛手紙 墨一枚とカーボン複写二枚 図版23

(封筒裏)佐渡/ 木子山人/十六日/

(手紙) (一)別紙の通りに書いて皆様に送った/井上関谷氏が御苦労するから/ (二)湯山には今電報した/ (三)金鈴会は十四日晚として十五日晩上京十六日参観して上田先生宅参上としては如何/ (四)来月廿四日に国宝伝空海の心経を佐渡国分寺にて見る予定出来れば写真にして公開したい/

(別紙) 井上有一/江口草玄/関谷大年/森田子龍/様/一九五二、一、一五/中村木子/只今森田様から御手紙ヲ頂イタ。先日ノ欠席ハ何トシテモ申訳ナイ。年始ハドウシテモ都合ガツカナカツタノデス。何シロ生魚ガ相手故色々時間ニ制約サレル

図版23



ノデ、来月ハ出席出来マス。扱森田様カラノ雑誌ノ具  
体案ニツキ愚見申述べマス。先ツ名前ノ「墨人」墨  
友「すみの友」は大変よい名前ト存ジマス。次ニ編  
輯ハ発行部数ヲ見ネバ何トモ申上ゲカネマスノデ  
一応発行部数ヲ見タ上デソレニヨツテ書道出版社責  
任者タル大資本家森田ト交渉シテ編輯料ヲウント高  
クトレバヨイデセウ。ウハァ〜〜故ニ編輯  
料ハ一応森田様ノ仮定ニ依ル算定ヲ基トシテ私ノ意  
見ハ会ノ内部ニ於ケル同人相互ノ間ニオ互ニ負担ヲ  
感ジル様ナコトハイケナイ、オ互ノ立場ヲ理解シ合ヒ  
尊敬シ合ヒシナガラ結ラレネバナラナイ。ソコデ予  
算ノ場合ニハ編輯担当費ト指導費デア、編輯担当者  
ハ今ノ処井上、関谷両氏シカナク私ト江口氏ハツブシ  
ノキカナイ代物ダシ森田様ハ墨美デ一寸手が出ヌシ、  
出版ノ方デモ忙シイカラソコデ非担当者ハ担当者ニ  
対シテ精神的ニ成ル可ク負担ヲ感ゼナクトモヨイ様  
ニシナケレバナラヌシ、担当者ハ色々物的ニ、又時間  
的ニ自分ノ担当ガ負担デナイ様ニシテナイトコンナ  
仕事ハ長続キシナイ。コレニハドウシテモ編輯料ヲ  
成ル可編輯担当者ニ差上ゲナイト考ヘテイル。所デ  
三誌の出版社ノ手元ヲ考ヘルト墨人ハ赤字出版 墨  
友ト「すみの友」デバランス出来ル実態ト考ヘラレル、  
其ノ結果編集料ノ一率五、〇〇〇円ト言フ数字ガ出ル  
ノデハナイカト思ハレル、云ヒ代ルト各誌五、〇〇〇  
円ハ編輯労力ニ対スル報酬ノバランスデナク出版利  
益ヲ基準トシテ報酬トモ考ヘラレルノデ墨人会トシ  
テハコレヲ考ヘテ編輯雑費ヲ含ム手当ヲ考ヘタイ。  
次ニ指導費ハ同人平等ノ仕事故コノ分ハ支払フ事ナ  
ク蓄積シタイ。尚私ハ佐渡ニアル国宝(未発表ノ分)等誰カニ写真ヲトツテモラツテ  
墨美ヤ其ノ他単行本ヲ出版シテモラツテモヨイト思ツテイルガ之ハ別トシテ森田様  
ノ予算ヲ基準ニシテ次ニ私案ヲ立テテ見タガ皆サンノ御批評ヲ仰ギタイ。(湯山ハ  
毎日展作日展作返送スル様ニ手紙ヲ出シタガ返ツテコヌノデ今又電報ヲ打ツテオイ  
タ要心/表にして)支出(第一案)/ (一)編集費 一一、〇〇〇円/ (二)墨人 五、  
〇〇〇円/ (三)墨友、すみの友 六、〇〇〇円/ (四)事ム所費 一、〇〇〇円/ (五)蓄  
積 金一〇、五〇〇円/ 第二案/ (一)編輯費 九、〇〇〇円/ (二)墨人 四、〇〇〇円

／2墨友、すみの友 五、〇〇〇円／(二) 事ム費 一、〇〇〇円／(三) 蓄積 金 一二、五〇〇円／いづれも編輯は実費しかありませんが予算の中に出る来る丈多く仕度い気持です。／乞御批評

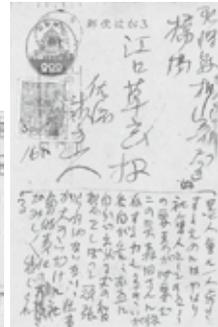
※追資三十二 昭和二十七年(一九五二)一月十六日付 中村木子、江口草玄宛手紙 へ

ン 図版24

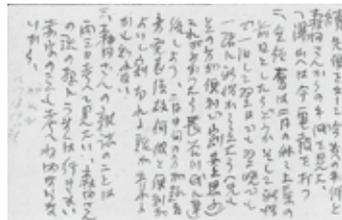
(表) 新潟県柏崎局区内橋場／ 江口草玄様／佐渡

／ 木子山人／16日／

(裏) 統 先便を出して今貴の手紙と森田さんからの手紙を見た。／一、湯山へは今電報を打つ／二、金鈴会は二月の我々上京の前日としたらどうかそして新潟で一泊して翌日でも翌晩でも一諸に新潟から立たう(兄もその方が便利で割安と思ふ)これがよかつたら長谷川氏に連絡しよう。二月中旬の方が趣旨書発表後故何彼と便利がよいし割切れる話が出るかも知れない／三、森田さんの雑誌のことは両三日考へて見たい。森田さんの話の様にうまくは行かない赤字のことも考へねばならないから。／(表面) 墨人会も一人歩きするためにはやはり社会人としての色々の要素が必要だ／この点森田さんに依存する力も多きい各々が各々お互に自分で出来る丈の智慧をしぼつて頑張らねばならない、仕事が大きいにだけ社会的責任の重さがみし／、感じられる



図版24



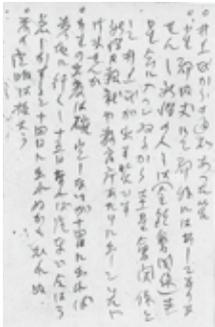
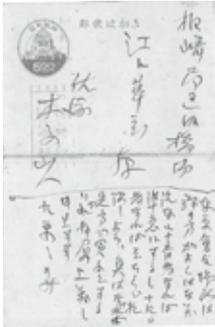
※追資三十三 昭和二十七年(一九五二)二月八日消印 中村木子、江口草玄宛手紙 へ

ン 図版25

(表) 柏崎局区内橋場／ 江口草玄様／佐渡／ 木子山人／

(裏) ○井上氏からの通知あつた筈／○小生都内丈にて都外には出してありませんし新潟の人々は(金鈴会関係) 圭星会に入つてゐるから圭星会関係として井上氏が出す筈です／新潟日報社や教育庁あたりに出していた、けませんか／○小生の出版は

図版25



確定しないが十四日にあれば貴地に行くし十五日なれば汽車で会はう若しかすると十四日に出れぬかも知れぬ／○米の証明は持たう／(表面) 東京会合場所は駅の方がよくはないか汽車も十五日発なれば準急にするし十四日発なればそちらで相談しよう。魚はなければ先方で買ふとするいづれ拝眉の上萬し申上ます／右要々のみ

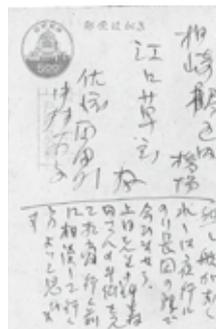
※追資三十四 昭和二十七年(一九五二)二月十日消印 中村木子、江口草玄宛手紙 へ

ン 図版26

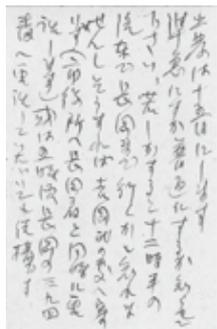
(表) 柏崎局区内橋場／ 江口草玄様／佐渡両津町

／ 中村木子／

(裏) 出発は十五日にします／準急にするか普通にするか知らせて下さい。若しかすると十二時半の汽車で長岡まで行くかもしれませんしそうすれば吉岡氏の処へよります(市役所へ長岡着と同時に電話します)或は五時頃長岡の三九四番へ電話していたゞいても結構です／(表面) 然し船がおくれしは夜行にのり長岡の駅で会いませう。／上田先生の件森田さんの手紙を見て相当行く前に相談して行く方よいと思ひます



図版26



※追資三十五 昭和二十七年(一九五二)三月十一日付 中村木子、湯山様宛 カーボン

複製薄紙一枚 図版27

湯山様／半月ばかりの旅行から一昨帰りまして貴翰拜見して感激致して居ます。貴殿が表装屋であり私が依頼者だ」と言ふ関係をはなれて懇篤な御手紙はあなたが芸術に関して如何によりき理解者であり且書道の発展に如何なる熱意を以つてゐられるかと言ふことがうかゞはれるからです。然し私は私としての気持から芸術を愛し書道の進展を願ふ同じ心の情熱からあなたの御期待に添へ得ないことを本当に遺憾に存じてゐます。方法と時期に関しては先日にも上田先生に随分叱られてしまひましたがこれとても圭星展の募集の邪魔にならない様、圭星展の発足がこれらのことに災されざる様にと心がけて随分考へ抜いた結果に外ならない

図版27



ことを申上げて御諒解を願つた次第です。只人間の修養云々は私達の此度の行動に於いて師に対する反逆とか書道界に於ける反逆とか非常識とかに解する人も多い様ですが、私達の今度の行動こそ本当に師である上田先生の意志をつくことであり先生の胸底にある芸術の真実に生きる所以でありまして私は最も先生に忠実な弟子であることを自負して止みません。これを反逆目しする人々こそ本当に師を自己栄達の具に用ひ師を単なる封建的概念の中に過して道具化せんとする人々と考へてゐますし手島様大沢様始め先輩の諸氏からも激励上がどん／＼来てゐますが此度の行動が書道界へ反逆であると解する斯界の人々があつたとしたらそれこそ書道界を私物化し書を永遠に感念の枠にとぢこめて書を、芸術を、永久に滅する即ち書を私の榮譽の為の政治的具として用ひて恥ぢい破廉恥漢であり一日も早く書の世界から葬るべき悪逆者です。これらの人々により作品の題名までが勝手に変られてゐる現状は少なくとも常識あり、書を愛し、この発表を願ふ人々にとつて私があへて悪逆者と叫ぶことも御諒承出来得ること、存じます。私は今不幸にしてあなたの御希望に添ひ得ませんがあなたの私達に対する愛情には感泣してゐます。あなたの御手紙を拝見しても私の前途がいかに多難であるかを予想されますが只真実の為にいかなる苦痛をもどんが苦難をものりこえて進むの覚悟を新にすると共に時代の人々が必ずや私の屍をのりこえて前進することを確信してゐる次第です。今後共よろしく御教示御善導御祈り致します乱筆乱文多謝／＼ 三月十一日

※追資三十六 昭和二十七年(一九五二)三月十一日付 中村木子、墨人会同人宛 カ一  
ボノ複写薄紙一枚 図版28

○長いこと留守にしてゐて皆様からの御便りをいたゞきばなしなのでまとめて御返事します。／＼森田さん、先日は失礼、何しろ二十年ぶりの旧友なのでぐでん／＼で京都市はアブナイので止めました。翌日有田さんの学校へ電話して京都市の話を書きましたがああ学校へ電話は駄目ですよ、これはてゐるらしい／＼競書作品は有一兄からの後の通信間に合はなくて私の処へ送つてきたのでそのまゝ、選して井上さん宛送つておきました。／＼湯山の手紙懐柔第一号ですな。先方へも条理をたてて然もこちらも毅然として名文？をかいて湯山へ出しておきました。これは墨人会としての手紙でなく個々に送つて来たもの故この方が礼儀かと思つて出したのです。別紙は写しです。／＼帰路井上さん、江口さんのところへも

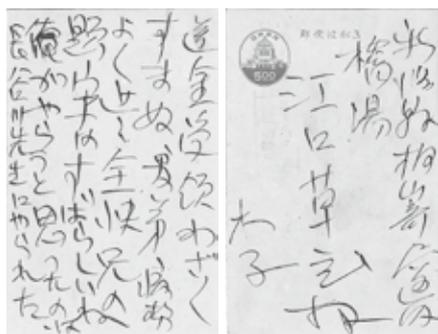


図版28

と考へたのですが弟同伴と特に弟の受験勉強の時間もありますのでそのまゝ、帰りました。／＼森田さんには迷惑かけつぱなしですみません。／＼井上、関谷さん編輯の苦勞御察し致します。／＼井島先生が京大試験最中にわざ／＼時間を下すつて感激してゐます。五月例会に鮮細に報告します。あれだけの話をかいたら原稿の百枚位になり愚才にはとてもかけさうもありません要点は次の通り。／＼在野派のアカデミーにならない様注意が肝要(創造美術がそうなりかけたことを指摘)／＼その意味からも同人展が望ましいし研究部員への取扱(精神)に注意を要する。同人展も早く開く必要あり(年一回関東／＼関西)／＼集会は可成多くやることと色々な切崩があるからその点も充分記をつけろ但し師についてゐることや書道界で人気のあることは別にプラスになる点は何もない。切崩されるな。／＼墨美をイタリヤへ送る様にしておいた。／＼人間を作ることが先か技術が先かについて／＼芸術の場合「芸術する人間」だ古い作家は人間性を強調し乍ら人間と言ふ言葉から来る感念の情性でやつてゐるからいけないし、上田先生は人間が出来ないから技術の横ばいだ／＼作品は只面白いただけではいけないのでそこに蓄積してくる進歩が必要だ作家はあくまで芸術する人間をそだてることでありこれがなかつたら芸術の進歩はない云々これは森田さんから助け船を出してもらつて今度の例会に話す。／＼墨人会同人御中 三月十一日 木子生

※追資三十七 昭和二十七年(一九五二)三月十四日消印 中村木子、江口草玄宛手紙  
ペン 図版29

(表)新潟県柏崎局区内橋場／ 江口草玄様／ 木子／  
(裏)送金受領わざ／すまぬ。愚弟病勢よく近々全快兄の題字ははすばらしいね俺がやらうと思つたのは長谷川先生にやられた。



図版29

※追資三十八 昭和二十七年(一九五二)三月二十四日付 中村木子、江口草玄宛手紙  
ペン 図版30

(表) 柏崎局区内橋場 / 江口草玄様 / 佐渡郡両津  
湊 / 木子山人 / 三月廿四日 /

(裏) ○関谷氏困ったことになったね、辻君から手紙をいたゞいて弔電をすぐ打つておいたがそま、ま香奠もやらない / 井上氏に昨日論説やり作品を送った時に個々にやらす墨人会として贈つてはどうかと書き送つたが / 関谷氏の言ふ通り女房は大切にすべきもの也。あの、二日から俺の処ではないつも床の間に女房を上げて毎朝拍手を打つて拝むことにした。兄のところもそうするか 兄の室の押入の上の段へ奥様をのつけておくことが望ましい / ○兄の作品が俺の処へ来る筈のが(廿日頃迄)まだこないが早くてのむ。圭星会で雑誌を出すとなると発行日が遅れることは困るから。 / ○五日は岐阜にきめよう。関谷氏ももつと時がた、ねば前後策など冷静に考へられないから。或ひはその頃なれば何彼と彼も考へてくるだろう。 / ○弦巻さんへは小生もかんたんに書いておいたが墨人の問題には一切 / (表面) ふれないで「拝眉の節申し上げる」としておいた、 / ○近頃小中学校の卒業やなんかで、テンヤワンヤ、 / 特に今月の墨人、墨友の論説が一しよに命令されて面喰らつたよ。随筆風に言いたい放言つておいた。圭星会や、大家連の中の中には一寸耳のいたい人々もあるだらう。 / ○書芸新報か書壇新聞をとらうかと思つてゐるが住所と会費を知らせて下さい / ○作品なまけておけると罰則にこの次壺升かわせませすよ、奥さんによるしく



図版 30

※追資三十九 『墨友』創刊号(改題第一号) 昭和二十七年(一九五二)四月一日発行

中村木子評

杉本昌広「元日」 たいへんりつぱにできました。ほんとうに、どうどうとして、見たとたんにわたくしはおしたおされそうでした。こんどは、ふでをかみに、おしつけないで書いてみましょう。 / (中村木子)

宮下リヨ「早春の庭」 あなたのお庭のむこうに海がみえますか。大きい大きいうねりの海、どこまでもうねつてうねつてつづく海、海は大きいですね。でもあなたの作品も海にまけない様に大きいね。立派に出来ました。 / (中村木子)

竹下勇「美しき名よ寂寥」 四角な紙面に菱形の切線に文字をならべ、然も上部の美と、下部のよが垂直線にあることは、この作品を平板にしている最大の原因だ。若し即興的だとすると君の人間的に実在するものを、養わねばならぬし、構成に追求したものだとする前記に一考してはいかが。私はこれは君の思いつきの作品であつて

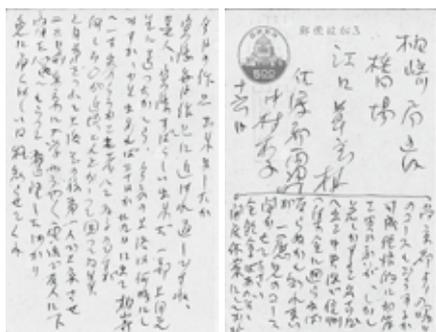
ほしいと願つているがそれだとするともつと情熱をたぎらすべきだ。 / (中村木子)  
西山哲夫「春月朧々」 大きい、大きい。四字の占める領域は実に大きい。正に「春月朧々」だ。始めて見る君の作品に方向の示唆も出来ないがこの呼吸でもう少し筆が開いてくる様になればやはり一応方向をかえねばなるまい。とにかくこの作は更に線の厚みを加えたら完璧だ。 / (中村木子)

※追資四十 昭和二十七年(一九五二)四月十六日付 中村木子、江口草玄宛手紙 ペン

図版 31

(表) 柏崎局区内橋場 / 江口草玄様 / 佐渡郡両津  
町 / 中村木子 / 十六日 /

(裏) 今月の作品出来ましたか / 実際毎日作品に追はれ通しですね。 / 墨人、実際すばらしい出来だ一部上田先生に送つたかしら。今度の上洛は何時にしますか。小生出来れば三十日か廿九日に出て柏崎へ一寸寄らうかと考へてゐるのですが何しろ○が近ごろとんとか、つて困つてゐます。 / 正月弟をつれて上洛その後弟一人で上京させ二三日前東京に入学やうやく電話で友人に下宿を心配してもらつて整理したばかり兎に角くはしい日程を知らせてくれ / (表面) 尚京都よりの帰りのコースもどうするかかなり経済的に切符を買ひ度いが、しかし若しかすると名古屋へ出て中央線で信州へ集金に廻らねばならぬかも知れないが 一応兄のコース聞かせて下さい / 金鈴会はあのみ、○開店休業にしておくか



図版 31

※追資四十一 昭和二十七年(一九五二)五月一日発行 『墨人』第二号 中村木子「作品批評」 江口草玄

作品A、古い唐紙に青墨での作品、料紙の古色と、墨色とがよくマッチして明るく、和いだよい気持。特に字々の持つナイーブな形はユーモアさへ感ぜられ見るからに楽しめる作だ。上部をうんとつめて下部を広くした構成もこの作品を更に大らかに輝かせている線がもう少しねばるか、線質に変化があつたらもつと腹ごたえがあつたのではなかるうか。 / 作品B、いつかの夜新濁でのみ明かした時一寸兄の口からもらった構成で苦心のあとが見うけられる、真中の黒がよくきいてるし左側の方の下から上へのびて二つに分かれた線あたり心にくいまでよく神経が行届き、それでいてこの作品は兄の欠点であるギリギリの神経質的な苦しさが見えないのは心情の高さの為であり兄の人間的な大きな成長であることを思つて本当にこれはすばらし

い。こんな作品を見せつけられると自分自身の貧困さが恥しくもあり全くいやになつてしまふ

※追資四十二 昭和二十七年(一九五二)五月一日発行 『墨人』第二号 中村木子「習作批評 江口草玄」

原始に近い書をここまで近代化したことに驚いた。一見素朴な線で、しかもカスした線のさわやかな感触が心よい夢路にさそうが、長く見ていると、行き届き過ぎた神経のこまかさが返つてズキンズキンと眼を射ぬいてくる様だ、原始の人々の生活の中から生れた木簡から逆に、木簡を通じて原始の人々の本質まで自分自身を掘り下げて行くこと、原始人の人間性にふれ合う様な現代人の人間性への追求が大事であることを私自身反省して痛感される。

※追資四十三 『墨友』第五巻第四号 昭和二十七年(一九五二)五月一日発行 中村木子「墨友教室」

昨日小学校の新生の父兄懇談会に出席して学校医の先生の御話を伺つている中にこんなのがあつた。／即ち初生児は全体一〇〇の中七〇は普通児で三〇が虚弱児だ。所が生まれて一カ年目になると三〇が普通児になつて、七〇が虚弱児となるそうです。／然もその一年児の三〇の普通児の中に一五は初生児の虚弱児が健康になつて入つていたのであつて、そうすると生れたばかりの子供が一年間、人間の仲間をしている中に実に百人の中五十五人が虚弱児にやつてしまふのだと聞いている私もこの数字の前に大いに驚くと同時に私の日々の生活に恐れをなした次第です。／更に医師は語をついで。これは大人が大人の世界、大人の生活からのみ子供を見下して、子供には子供の世界のあることを理解しない、即ち子供の生活に対する無理解からくることであつて、言いかえると子供に対する思いやりが無い、気持の上では子供を目の中に入れてもいたくない程可愛く思い乍らも、子供を理解する智性よりも、『大人の世界から見る子供』と言う根本的な誤謬から事実子供を愛していない結果になるのだ』と結論を出しましたがその時に私は『中々話せる先生』だと拍手を送ると同時に、父としての自分自身を振り返つて自分が常々考えていることが本当に自分の生活を通じて行われているか、と言うことを反省して空恐しい気持ちでした。／先日京都で長谷川先生は『子供は本当に子供から学ぶ大人に出会つた場合のみ、子供は大人から学ぶだろう』と言つていますしルソオのエミールは序言に於て『一体吾々は子供というものを少しも理解しない。吾々が子供について現在のやうに誤つた考えを抱える限りは、進めば進むだけ迷うのみだ。最も賢明な人達でも大人が学ぶべきことばかり考えて、子供と言うものはどんなことを学ぶことの出来る状態にあるかと言うことを考えない。彼等は常に子供の中に大人を求めてい

て、大人になる前に子供がどんなものであつたかを考えない』と述べ、更に彼は第一編の冒頭に『造物主の手を出る時は凡ての物が善であるが、人間の手に移されると凡ての物が悪くなつてしまふ』と言つています。／然し乍らこれらの、或る樹の木の結ばせようとしたり、畸型の物を作つて喜んだりしようとするのが、社会のあらゆる概念の中では常識化されてしまつて、何の不思議をも感じないのであり、むしろこれが当然の如く、そうすることが人間の成長であり、文化の進歩であるかのように考え続けられていることは実に恐ろしいことです。／特に書の世界では一層それがひどく感ぜられず、そうしないと、教える者も、教えられる子供も、その子供の親等も納得しないような現状は誠に困つたものです。無論文化の進展、芸術の進歩は他から与えられ色々な知識、技術が当然大切です。それがなければ自然人と自在人は同じと言うことになりませんが、今までの書の教育の様に、知能や技術を支え向上させることによつて、造物主が与えた善なるもの、美なるものを破壊してしまふことは、そしてそれが教育であると常識化されていることは芸術の芽生を絶ち切ることなのです。一つの手法が万人に与られ、子供はそれを引のばして白紙の上におく、教師はその引のばし具合を見て採点し、その点によつて子供はうれしがり、親達はその教師に感謝し、門人が多くなつて、その日からサンマの葉が玉子焼きに代る、更に中央ではこれらの庭師に似た人々の成長した廃品種族が大家とよばれ、全国から集る小庭師達の作を審査する。彼等には美の感性もなければ理論もなく。自分が師匠と言はれる人々から教えられた枠に入るか、否かによつてその順位が決定し、それをおしただいた地方の小庭師は更に社会的名声を博して玉子焼が刺身となり茶碗蒸となる、かくして書の美は次第に俗化され、書の造形性も、芸術性も次第に失われて行くのであつて、学校医の先生が話された一年間に百人の初生児が五十五人虚弱児と化して行くこと、何等変ることが無いのです。／私達は終戦後アメリカの教育に習つて合理主義が取り入れられた際一時教育が虚脱の状態になり社会の人々はこれを新教育と称し放任教育と誤解されて今又智能の低下が問題になり之に対して批判が加えられています。で実際正しいことが、真実が、歴史と慣行の中に観念化されて、その真実を再び取りもどすことが社会がこれを奇とすることに驚きましたが、書の世界でも今回の墨人会の運動を書道界に対する反逆であることが革命であるとかの非難を聞きますが、これは今までのあやまれる書の世界に対しての反逆があり革命であつて書そのもの、芸術そのものに対しては、否人間そのものに対する復古運動であり真実の道であり、これを書の芸術の本質に対する反逆、破壊と考える人達は所謂新教育に驚いて放任教育を履行した様な人々であり、小庭師であり、小庭師の親玉の人々なのであつて、これらの人々は最早社会からも歴史からもことごとく抹殺されるべき人々であり、これらの人々にまかせておいては芸術も、芸術としての書も滅して、然もその罪悪を理解しない人々であり、百人の初生児を一年間に五十五人も虚

弱児にして尚自分の愛情が純一至高のものであると誤解している誤れる母と何等愛することのない人々なのです。／ 真実をつかみ度い、そして真実そのものの子供から学び度い、エミールは更に語をついで『私は貴女に訴える！枯れないうちに此の若林に水をおやりなさい、この若樹の結ぶ果実は他日貴女の無上の実となるだろう。貴女の幼児の心の周囲に遅れないうちに垣を結いなさい』と、私達はこの墨友教室を通じて穩当に子供に学び、子供の真実に学び、そしてその真実に垣を廻らせて大事に大事にあたため乍ら、その若樹はすぐすくのびてやがて美しい実がなることを確信致します。最後に私はこの文を墨友教室をあらしめた、若き薄幸の人、関谷義道氏の御令閨にささげると共に、かがやける美しき御霊に、永遠に墨友教室にとどまりて、のび行く若樹を見守られんことを祈りつつ筆を止めます。／ 一九五二、三、二一、春分の日／ 関谷氏夫人の冥福を祈りつつ 木子記

※追資四十四 『墨友』第五巻第四号 昭和二十七年（一九五二）五月一日発行 中村木子評

大橋タミエ「成功」 何と自由な、そして逞しい作品でしょう黒々と紙一ぱいグングンかき進めていてしかも筆がよく紙にくい入つています。だから健康で、大らかで、リンとしています。しかも大人はとても真似出来さうもない名前を、大胆に、本当に大胆に右側に楽々とおさめたあたりは、子供ならでは出来ない仕事です、タミエと左にかしげてエの右下に点をいれたあたり、微笑ましい限りです。大らかな子供の世界、楽しい子供の夢、純な子供の個性、それが書の生活を通じて「成功」と言う文字を通じて書的な芸術が逐次よりあげられて行くのです。（木子）

北島よし子「質素」 高貞碑を彷彿した様なこの作品は見るからにスッキリしてすがすがしい感じを与えます。「質字」の上部に一寸作り過ぎた様な処もあつて貫通しないものが目ざわりですが「貝」「素」は線質もよく特に右へ張り出した素の横線などの構成が面白く思います。作品も立派だし、見ていたのしくなる作品とはこんな作かと思われて評をかき乍らもうれしくてたまりません。（木子）

近藤正男「太虚」 ふてぶてしい構成に先ず圧倒されそうです。／ 斜線を主体にした構成は大きな動きが感ぜられますし、白紙に黒くかいたと言うよりは黒い紙に処々白く残した様に見える白が、実に美しく浮いて見えます。／ 左下から右上へと動く線は右上に大きな白を作つて、右上部の紙の向うに大きな世界と喜びを感じさせます。／ 只線質がもろく上すべつてゐる為これ丈大胆な構成をささえることが出来なかつたのは残念です。それにはたゆまないデッサンが必要でしょう。（木子）

※追資四十五 昭和二十七年（一九五二）五月二十六日付 中村木子、墨人諸兄宛手紙  
カーボン複写薄紙二枚 図版32

墨人諸兄 廿六日 中村木子／○先日の京都無念至極／○ウレシクたまらぬこと／ (1)朝日綜合展：此点森田サンに感謝の言葉ナシ／ (2)義道氏のオメデタ 以前有一への私信に時間を経て善処しようと言つてやつたがこちらで余力になれなかつたこと申訳なし／ 墨人のためにもめでたし／ (3)書道出版社 大した赤字もない様子／ これ又墨人の将来のためウレシイ限り／○有一の手紙：八月例会／ これは森田さんから朝日綜合展の詳細を見てからにしよう。実際、九月に展があるとするとも八月は一番皆んな苦しい時だ／○宇野氏の墨人も通教の目的云々の文／ 宇野氏らしい見方なり あれでよいのだ 俗界に游泳する宇野氏としてはあゝとしか森田さんや吾々の声明は解釈出来まい。皮層しかわからぬ近視眼だよ。彼は肉体も精神も近視か斜視か乱視だよ。只彼の言の上に惑される人々が可愛想だね。とすると彼も一種も殺人だ。もつとも圭星会員を人海策戦の犠にするから見ればこれ位はオチヤノコサイサイさ／ 彼による一部の犠牲者は追々こちらのことが判つて来てあますよ。／○悲しいコト／ 作品が出来ないこと 前のを送るとすぐ次のが頭からぬけないが、出来ない 出来ない 悲しいきわみ。／○森田さん、(1)この前の様や墨 手に入りませんか あれは大方つかつて残りわづかになりましたので／ (2)スピッツまだ出ませんか 純粹のは仲々だめらしいね。／○草玄氏、柏崎行、何時か一寸判らぬ。まあ寝込みをおそはれる覚悟が望ましい／○有一、義道、編輯御世話 僕が一番遅れるかしら、今後気をつけます。カンベンカンベン／○白と黒が出ると多少こちらへも響くかしら 出たら一応見たいもの／○毎日展三部アンデパンタンを喜び乍らやはり一部審査員の肩がきのほしい人がある。これが浮世さ アハハハ

※追資四十六 『墨友』第五巻第五号 昭和二十七年（一九五二）六月一日発行 中村木



子評

まにわともえ「えんそく」 えんそく、えんそく、うれしいね／ お山かしら。それともお船の見えるお海かしら／ うれしいな、うれしいな、両手をふつて元気で行きましょう。あなたの作品ほんとうにうれしいえんそくがにじみ出ていますね。少し紙のよくれたところが、このばあい美しくみえますね。／ ほんとうにこりつぽです。(木子)

千代子「子供」 形を面白くゆがめましたね。これは自然に出きたのではなく、よく智慧を働かせて白い紙の上へ黒い線をいろいろ組立てて見て作った形です。立派な建築や、彫刻やその色々の作家達はみんなあなたの様に形を美しくする為に色々と研究し苦んでいるのです。この作ほんとうに美しい形です。然も横線を右の空間に引きはなし名前をイ篇とくつつけてそれと対称するように最後の点を大きくデンとしめつけたことなど仲々こまかい所まで注意してあります。この場合は紙のうらがよごれているが目ざわりです。(木子)

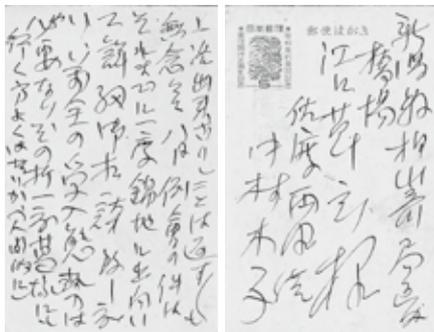
洞谷「桜咲く丘」 何と形容してよいやら、先ず一見して圧倒されそうです。白の上へ黒でかいたと言うよりは、黒の中の白が美しいですね。この題の作品は中々よいのが見当らなかつたのですがこれだけが特に光っていました。然し名前がこの作品に大きな「二」していますよ。名前の所をもつと黒くして名前を抜くか、或は名前も一語に本文に加えるかして工夫しないとこのままではとても見られませぬ。全紙面から大きく空間を支配しようとする構図が、その紙面の一隅に神経が行きとどかない様なことではいけません。と思います。(木子)

※追資四十七 昭和二十七年(一九五二)前半(月日不明)

ペン 図版33

(表)新潟県柏崎局区内橋場／ 江口草玄様／ 佐渡  
両津湊／ 中村木子／

(裏)上洛出来ざりしことは返す／も無念々々八月例会の件はそれまでに一度錦地に向いて詳細御相談致し度い。萬全の受人態勢は必要なり。その折一度葛塚にも行く方よくはないか。(人間的に)



図版33

中村木子、江口草玄宛手紙

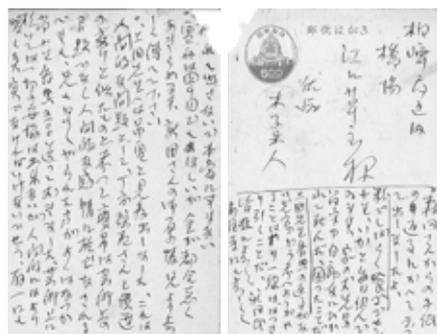
※追資四十八 昭和二十七年(一九五二)六月十八日消印 中村木子、江口草玄宛手紙

図版34

(表)柏崎局区内／橋場／ 江口草玄様／ 佐渡／  
木子呆人／

(裏)札状も出さないで本当にすまない／○雪舟は四千元でもほしいが金が都合悪くあきらめます。

新田さんの御厚情兄よりよろしく伝えて下さい／  
○上田先生へは弔電と見舞い出しました。これは人間的な問題として、丁度弦巻さんと僕達の交りとしたものと考へて慶弔は芸術上の問題でなく人間的な感情に於いてなされるべきも、兄も早くやられた方がよくはないか／尚小生香典五〇〇送つておきました。芸術上に於いては一切の妥協は出来ないが人間的にはより暖く真実でなければいけないのでせう。有一にも／(表面)森田さんからの手紙の返事にかへて云つて出しましたよ。／(裏線)区切り)／粉でしばらく喰へるでせう。小生、いかと毎日但んであります。家の犬先日留守中自動車にひかれて死んだ。困つたことだ／(裏線)区切り)／上田先生香典の返事が無い。先方でどう考へようがやることはやり一線は、はつきり引くことだ。／皆様によりしく。新田氏安住寺にもよろしく



図版34

※追資四十九 『墨友』第五巻第六号 昭和二十七年(一九五二)七月一日発行 中村木子(巻頭言)

藤原義江は『カルーソーと私』と言う短い文の中で『私がかんから感激したのは、あの聞く者を皆強くひきつける力を持った声だけではなかつた。カルーソーの持つて生れた謙虚さと、それにも増して彼の持つていた美しい人間愛の精神であつた』と書いていますがカルーソーが世界的なオペラ歌手として一九二二年に世を去つた時、世界各国の、男も女も彼のために泣き何千と云う人が喪服を着たそうです。ところがこの有名な歌手カルーソーは子供の時から天才かと言つてそうではなさそうです。彼が最初に音楽の先生の前で歌つて見た結果は余り出来がよくなかつた。先生は試験の後で「君の声は窓のよろい戸を風が通るみたいだ」と言つたそうですから少くとも天才とか神童とかよばれる人ではなかつたのです。ところがその人が世界的歌手として多くの人々からおしまれたのは藤原さんが言われる様に美しい人間愛の精神です。そして、その為には断じて行つて行く勇氣です。一九二〇年一月歌劇フリジール、ダモールの初めの一幕の最中に喉の血管が破裂した。けれども次から次へ新しいハンカチを取りかえ乍ら最後まで歌つた。そのハンカチの一つ一つが真

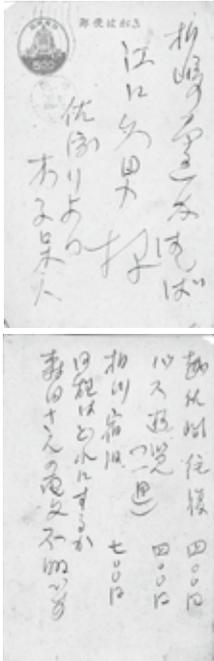
紅に彩られた、そしてこれが彼の最後の舞台でした、何と大きな勇氣と愛でしよう。私達も決して天才ではありません、いや大変な愚かものです、でもエンリコ、カルーソーの様な愛と勇氣に徹したいと願っています。真実のある所、よしそれがいばらの道であり、自殺的行為であるうとも真実への愛は大きな勇氣を与えてくれるでしょう。皆さんと共に、諸君等の先達として墨人は堂々行進を続けます。真実へのために、皆さんもカルーソーの様な愛と勇氣を持つて進みましょう。

※追資五十二 『墨友』第五卷第六号 昭和二十七年(一九五二)七月一日発行 中村木子評  
**光代「山高水清」** あなたの腕前はすばらしいね、技術の錬成上やはりこうした勉強が大切ですね、筆がよく開いて線に厚みが出来、運筆も自由で仲々達者です、本当にこんなタン錬もどんやつて下さい。然しこれだけですと本当の作品は生まれませんよ、悪くすると猿まねになつては大変ね、あなたの心の歌を夢路の歌を聞かせて下さい。／ (木子)

※追資五十一 『墨友』第五卷第八号 昭和二十七年(一九五二)七月八日消印 中村木子、江口草玄宛手紙 図版35  
**松永詳司「月明波光」** 何と大らかな作品でしょう。見ている中に心の中のものもやもやとしたものがふつとんで底から私の心を澄ませてくれます、特に月や光などすばらしいね、懐をうんと大きくした形と、大きく空間から入つてくる運筆のゆつたりした調子、君の心の奥底にある大らかな豊かな氣持が、こんなすばらしいものを作つたのですね、こんなものを見ていると私も月の世界へでも旅した様な氣持になりますよ。(木子)

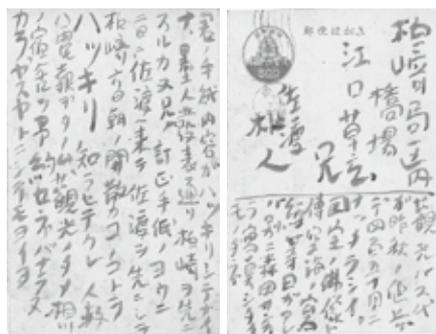
尾添和子「はなとり」 こんな美しい作品、あなたは意識しない中に、ぐうぜんに出来たものでしょう。特にお名前のあたりは美しいですね、でもぐうぜん出来たと言ふことは、あなたの心の中にこんな美しいものが、たくさんひそんでいると言ふこと、常々のたゆまない勉強が、こんな美しい花をさかせたのです。心の中の美しさ、それは何としても大切に致しましょうね。(木子)

※追資五十一 昭和二十七年(一九五二)七月八日消印 中村木子、江口草玄宛手紙 図版35  
 (表) 柏崎局区内橋場／江口久男様／佐渡りよつ／木子呆人／  
 (裏) 越佐間往復 四〇〇円／バス遊覧(一週) 四〇〇円／柏川宿泊 七〇〇円／  
 日程はどれにするか／森田さんの電文不明です



※追資五十二 昭和二十七年(一九五二)七月二十八日消印 中村木子、江口草玄宛手紙 図版36  
 墨 図版36  
 (表) 柏崎局区内橋場／江口草玄兄／佐渡／朴人／

(裏) 君ノ手紙内容ガハッキリシテナイナ、墨人発  
 表通り柏崎ヲ先ニスルカ又只ノ訂正手紙ノヨウニ  
 二日ニ佐渡ヘ来テ佐渡ヲ先ニシテ柏崎六日朝ノ開  
 散カコノコトヲハッキリ知ラセテクレ人数ハ電報  
 デタノムカ觀光ノタメ相川ノ宿舎ヲ予約セネバナ  
 ラヌカラ、ヤスヤトニシテモヨイヨ／(表面) 拝観  
 共バス代ガ昨秋ノ値上ゲデ四百五十円ニナツタラ  
 シイ、国宝の仏像ト伝空海の写経等日ガアレバ別  
 ニ森田サンカラ写真シタイモノダネ



※追資五十三 『墨友』第五卷第八号 昭和二十七年(一九五二)九月一日発行 中村木子評  
**大平泰子「白球飛ぶ」** 澄み切つた空、天高くはすむボール。／ あなたの作品からは野外の広場の楽しい野球の情景が浮かんで来ますね。線もしつかりして大地に大きく根をおろして少しもあぶな氣がありません。本当に樂し明るい立派な作品です。球はあなたの夢をのせて高く高く飛びますね。(木子)

尾添和子「白球飛ぶ」 おすもうさんのような大きな肉体、しかも少しのむだもない鋼の様な強さ、黒く、あくまで黒いうるしの様な墨色、じつくりと深く入つた線、じつくりと緩かに流れるリズム、堂々として強くたくましく見る方で圧倒されそうです。大体立派に出来ました。特にこの作品から飾氣のない素直な君の実直さがうかがわれて本当にうれしいです。(木子)

※追資五十四 『墨友』第五卷第九号 昭和二十七年(一九五二)十月一日発行 中村木子評  
**神田亮子「入道雲」** 幼稚といえは幼稚でしょう。ととのわなといえはととのつていません。しかしこれらの批評は書概念であつてそんなものを度外して本当にこの作品は美しい。／ それらはあなたの心が美しいからです。そして美しいあなたの心が偽らずにそのまま素朴に表現されているからです。正直な作品だからです、だからととのわなない様な所からかえつてほのかな暖かさを感じられます。／ 素直な美しい心、正直で偽りのない表現、これが本当に大切ですね。(木子)

勝部定真「入道雲」 大きくたくましい力がみちあふれています。しかも筆が水の流れの様にわだかまりなく運ばれているのでさわやかな感じさえ致して誠に立派です。／雲が一寸息苦しくなりましたが道などはほんとうにすばらしいです。すみが濃くすつてあつたら圧倒される様な作品でしたに残念ですね。(木子)

※追資五十五 『墨友』第五巻第十号 昭和二十七年(一九五二)十一月一日発行 中村木子評

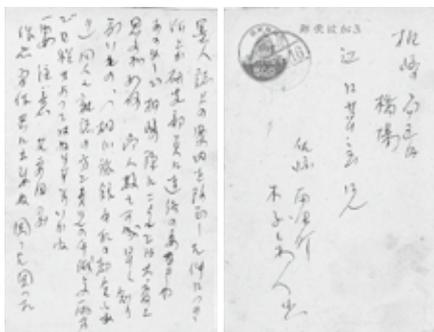
宇和富士子「雨後の横雲」 まじめにすつきりとしてよくかかれています。形等も整正でお行儀よく並んでいながら少しもわざとらしいところがなくてあなたと言う人と技術が完全に一致しています。けれどもいつもこんな風では進歩がありません。時々思い切つてあばれることも大切ですよ。(中村木子)

渋谷陽三「雨後の横雲」 高貞碑を見る様に整然としていて全体に力が漲り力の強いお角力さんでも見る様に堂々としています。本当の意味での力作と言えるでしょう。筆を押しつけた処が堅苦しいですね。押しつけないで筆をよく開くと重苦しさがなくなりもつとすがすがしくさわやかになつて来ます。とにかく立派によく出来ました。／(中村木子)

※追資五十六 昭和二十七年(一九五二)十一月十六日消印 中村木子、江口草玄宛手紙

ペン 図版37  
(表) 柏崎局区内橋場／ 江口草玄兄／佐渡両津町  
／ 木子山人書／

(裏) 墨人誌上の案内を改正した件につき何とか研究部員に連絡の要なきや／あのまゝで柏崎駅にこられては大変と思ふが如何 尚人数も可成早く知り度いもの。(相川旅館手配の都合もあり)同人も雑誌の方と貴兄の手紙との両方で日程まよつてはりますまいかね／要注意 右要用的み／作品習作共に出来ぬ困つた困つた



※追資五十七 昭和二十七年(一九五二)十一月二十五日消印 中村木子、江口草玄宛手紙

紙 ペン 図版38  
(表) 柏崎局区内橋場／ 江口草玄様／佐渡郡両津町／ 中村木子出／

(裏) アサヒグラフ構図出来ましたか小生トンと出来なく大弱り。小品乍ら墨人の死活を制す大問題也／心あせり大困り：／お互に頑張らう。笑れ物だけはなりたくないね／奥様によるしく

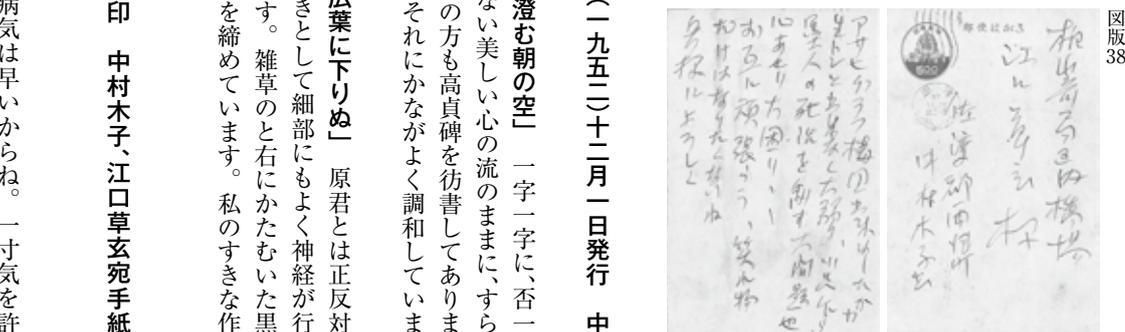
※追資五十八 『墨友』第五巻第十一号 昭和二十七年(一九五二)十二月一日発行 中村木子評

原勝彦「よべ一夜庭の落葉に音たてし時雨ははれて澄む朝の空」 一字一字に、否一点一画に真心をこめて、しかも君特有のわだかまりない美しい心の流のままに、すらすらかかれて大変美しく出来ました。しかも楷書の方も高貞碑を彷彿してありますがこの原碑も力強く然もすがすがしいものです。それにながよく調和しています。こんな態度を失はない様に。(木子)

※追資五十九 昭和二十七年(一九五二)十二月六日消印 中村木子、江口草玄宛手紙

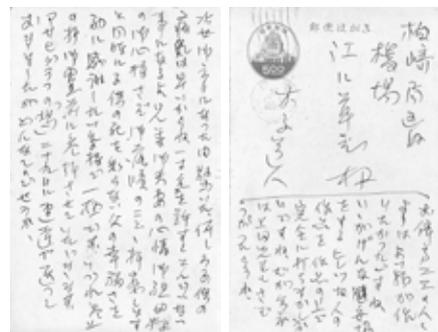
ペン 図版39  
(表) 柏崎局区内橋場／ 江口草玄様／ 木子道人／  
(裏) 次女御亡りになつた由驚いた。何しろ子供の病氣は早いからね。一寸気を許すととんでもない事になるよ。兄等ご夫妻の心情御祖母様の御心持さぞ御落胆のこと、拝察しますと同時に子供の死を知らない父の幸福さを神に感謝したい気持で一杯です。いづれ参上の折御霊前に参拝させていただきます。／アサヒグラフの「鳩」二十九日に速達で送つておきましたけどどんなものでせうか。／(表面)お偉方二三

『中津伸一「息をもて吹きとはしたる雑草の綿毛は広葉に下りぬ」 原君とは正反対な表現、一見素朴で稚拙の様であり乍ら線が生き生きとして細部にもよく神経が行きとどいて立派です。全体の構成も明るく近代的です。雑草のと右にかたむいた黒と広葉にと左へ張出した黒が響き合つて美しく全体を締めています。私のすきな作品です。／(木子)



の人々よりはよい物が作られたかつたですね。い、かげんな妥協をするヒレツな人の作品を作品の上で完無に打ちまかし度いですね。だが今度は上田先生もさぞつらかつたらうね。

図版 39



※追資六十一 『墨友』第六卷第一号 昭和二十八年(一九五三年)一月一日発行 中村木子評  
大貝光代「秋の野や草の中ゆく風の音」 素朴な姿、散漫な構成、それでいて鋼の様な線で全面をよく引しめています。草など特に面白い型ですね。音は一寸おかしながそれでも全体から楽しい夢を覚えます。(木子)

森谷喜男「臨張孟竜碑」 たくましい力、ふつくらした線、張孟竜をよく学んで大へん立派です。しかしこれは君の率直な感じをそのまま表現したのではありませんよね。先生か誰かのかりものでしょう。こんな習い方もあつてもよいがこれが全部ではいけません。(木子)

安本一夫「父母兄弟」 この級は皆出来が悪い。それはたしかに手本がむづかしかつたせいでしょう。しかしこれはよく出来ましたね。のびのびして気持がよいです。筆を引ずらない様にして下さい。(木子)

利田文子「いねかり」 すなおにただしくかかれて大へんお上品で立派です。あなたの心がすなおでやさしいからでしょう。しかもしんがしつかりとしていて力強くしやんとして見て見るからにすがすがしく秋ばれの天空の様です。(木子)  
豊島重三「いねかり」 すばらしい出来です、本当にすばらしい、そぼくな、そして日やけた力もちのお百姓さんの秋のとりいれが目にかびますね。とくに「いね」がりつばですいつもこの様に元氣一ぱいやりましょうね。(木子)

※追資六十一 『墨友』第六卷第六号 昭和二十八年(一九五三年)六月一日発行 中村木子「指導される方々へ」

いつものことであるが今度の審査にも(1) 見ていて何となく心の底から楽しく

なつて来る作品。(2) すなおな子供の個性の書表現が妥当な技術の修練を経て適当に表現されていること(3) 見ていて楽しく自由であり乍ら技術が至らない為美しくないもの(4) 大変立派にかけてはいるが技術が一方的であり、子供のそばに大人がいて、子供の手をかりて大人がかいてる様な無味乾燥の作品(5) (4)と同じであつてしかもその技術が大変幼稚なもの、等を対照として考へているが大體墨友の出品層には(4)が少く、その代り、(2)が多い様だ。そして一見自由にかいてる様に見えてその学校学校で、学校の特徴が見えて気懸りになつて来る。学校が一つ一つに類型化されたり習気が生ずることは警報第一号である。本当に自由であり個性が尊重される以上類型化する筈がなく、それは古い過去のものであれ、現代のモダンなものにしろいづれイミテーションであることには変りない。技術全体として割合多くに見られる特徴で注意せねばならぬこととしては(1) 紙質が悪くツルツルしている為筆が引つかからず上すべつてしまうこと(2) 筆がちいさきに失して充分の仕事が出来ないこと(3) 筆を引つぱつたり、おしつけて線を太くしているために線質が一様に堅く重苦しい(4) もつと筆を開くことと、粘つて行くこと等の技法の習得に直接の指導は留意すべきだ。(4) 指導者は表現の結果とか形の写実等にはのみ神経質にならず、むしろ根源的な線質、リズム美についての習得や、それらについての古典の鑑賞等に力を致し、個々の創造力の誘発に役立たせると同時に表現の方法に独自性を尊重すべきではないかろうか。以上指導の直接の場にある人々に失礼かと思いつつも心づいたままかきとめました。今月の選にあたつても以上の気持で選して見ました、したがつて写真版の諸作品は色々の行き方のももあるわけです。只この写真版の作品の様な粒えりの作品は墨友の独占場でこんな立派な作品は集まらないだろうと考へるとうれしくも愉快でたまらない。

※追資六十二 『書教育』No.3 昭和二十八年(一九五三年)六月一日発行 中村木子「習字教育に関して父兄としてお願い」

両津町社会教育委員 / 両津小学校PTA校外指導部長 / 中村佐魂 / 二、三日前PTAの委員会で小学校で毛筆習字必修を希望する父兄が大分いたし欠席した父兄も大部分の人々がこれを望んでいるらしい。これは或いは自分の学校だけでなく全国的な与論なのかも知れないとも考えられるので、私は私なりに書教育に関係ある先生方に勝手なお願いを列記してみたい。(1) 第一には書教育は漫然とした目的で国語科の中の硬筆習字をそのまま毛筆習字に移行する様なことはやめてほしいこれは過去の文検式な鑑賞眼もなければ(鑑定力と異う、過去の文検式な先生は古典の名称の鑑定は出来るが鑑賞の根元的な態度でない人が大多数である)創造力も、碌々美意識も持ち合わせない習字の先生が、子供の個性も、自由も束縛して、人間的に技術の無理強いをするだけで新教育の逆コースを行く恐れが多分にあるから

です。／(2)硬筆習字は国語の書取の為の修練の場として常用漢字を正確に記すことの為にという明確な目的の為に運用さるべきだ。美しく書くということは常用漢字を正確に書写するという目的からズレていると思う、自分の思想内容を美しく表現しようとする文字は勿論国語教育を基礎としてその上に立つものであるが、それと記号としての文字を美しく書くということは根本的に異なることは明確だ。／記号としての文字を正確に書き記憶することは国語教育の上に一段の強化すべき当面の重要事であろう。常用漢字でない書写体の文字の混入している様な硬筆手本を使つてそれから逆に常用漢字を教え込む事もある様な現状は精算して、常用漢字を正確に書写する能力からの発展の課程に従属的に必要あらば書写体は教えるべきであろう。／(3)毛筆習字は美表現の為の場であらねばならぬ、即ち文字を素材としての平面芸術であらねばならない。その為には絵画、工作との合体において芸術部門として別に分化して芸術部の中に視覚科聴覚科とするか又は音楽科と造形科とに分けて行ふか又は芸術部門中の絵画、工作、書、音楽、等に分れてその目的の為の教育が遂行されるよう希望して止まない。今までの様な小学校で習つた流の文字は鑑賞出来ても他のものは一切鑑賞出来ない人間を生む様な書教育や折角の子供の可能性の芽を盆栽式に育て上げて人間形成とか人間の創造とかからは逆コースする様なことになつては困ります。／以上要点だけを列記してみました。が近頃の文化という言葉の内容が知性にうつつたえるものだけを重視して、感情にうつつたえる教育が軽く扱われていることは跛行的な畸型児の人間を育成することでありまして人間社会の悲劇の温床となり、人類の破綻を来すものでして、この故にこそ修身科とか倫理科とかの採用が論議される基幹となつていゝのではなからうか、誠に悲しいことです。書を通じて芸術する人、芸術の鑑賞出来る人を作る様に願いたいものです。この様な希望は過去の文検式習字の先生や、或は今の普通科の先生方にも一寸無理な願いかも知れませんが、小学校の先生も大学出でなければいけないとして作られたとはいへ、旧制の師範学校の看板を塗るかえた様な新制大学の教育学部や、芸大にもその目的から相当ズレている様な処も或はあつてそうなのかも知れませんが、それはそれとして真剣に哲学する先生こそどの科目によらず望ましいことですし、特に特別科目にはそれが第一の要件かと思ひます。

※追資六十三 『墨友』第六巻第七号 昭和二十八年(一九五三)七月一日発行 中村木

子評

小豆沢信子「天気晴朗」 蘭亭の臨は強金界奴本らしい、ひたむきに古典に対する態度は、厳しゆくさえ感ぜられる、特に晴朗はよく出来ている、本当にすばらしい習作であり態度である。気は一寸整理が足りない。／(木子)

網代弘子「希望門出」 正直な作品として立派である。表面に巧さをすこしも出さ

ずいいてしかも内に充実した力をたくわえている。望の壬の第一画、明の堅画出の一画等、力をゆるめず堂々と押し切つて危気がない。然も全体が他からの借物でなく、あくまでも自分のものである処に私は大いなる喜びを感じる(木子)

松江支部 高学年と低学年との差が甚しく、低学年が見おとりがする。今月の網代君の作品の様に素朴な子供の歌声をそのまま聞き度いものだ。今までの書の觀念からは脱して新鮮さが見受けられるがそれ丈に新しい觀念、支部の類型の中の仕事が多いのはどうしたわけだろう。(木子)

上分支部 この支部の行き方は賛成だ、強くたくましい全体の作品を通して敬服する。只高学年がこのままではもう一つのマンネリだ。高学年に対しては古典に対する根本的な追求への道を開くべきだ。／(木子)

湯沢支部 この支部は二三の技術的に非常に進んだ子供と反対の子とが多く、低い方の子供は手本に対しては今までの古い行き方が踏襲され、優れた子供も又若年寄と言つた変てこな味に溺れる危険性が充分ある。これでは遊びごとの書でしかあり得ない。児童、青年と、年齢、環境、個性の中での本質的な物の見方、考え方が成さる可きではなからうか。芸術への連る道をまつしぐらに進めてもらいたい(木子)

両津支部 常に忙しい教室の中での、然も女教員としてこままでの精進には本当に敬服の外ない。／作品を通して常に考えることは、(1)筆が小さく、毛が充分に開かない為、押しつけが特に目ざわりになり、線質が枯渇して情緒に乏しく気魄がない。／(2)紙質が悪く線がひつかからなく上すべつた物になつてしまふ。(木子)

※追資六十四 『墨友』第六巻第八号 昭和二十八年(一九五三)八月一日発行 中村木

子評

花田克夫「節句人形」 君の支部の高校生は大変技術が出来ているが、それに頼りすぎて安易な作品が多く、低学年の内に仲々よい作品を見受るのですが、この作品は小学生をリーダーする立場にある君の書として実に立派です。無論技術的には色々注文はありますが、何と言つても個人的で、実直に、そしてあくまでも真面目に力一ぱいにかかれていて、その為に見る人が圧倒されそうです。(木子)

石倉康男「五月の空」 五月の空、鯉のぼりが高く上り、矢車が紺碧の天空にカラカラと鳴つて、希望に満ちた胸は男々しくはすむ五月の空、力が全面にみちみちて、何のこだわりもなく堂々とかがれていて、しかも用筆もよく行きとどいて大変立派です。のびやかな、健康な君の姿が目につります。(木子)

城西支部 今月の作品中何と言つてもあなたの支部が一ばん立派です。そしてそれは各自が皆それぞれに、個性的な仕事をしていることです。他の支部には、その行方が新しいにせよ、古いにせよ、皆一応それぞれの支部の類型化が見られるのですが、あなたの支部ではそれが全然感じられず、然もそれが、ごまかしや、ハッターと言つ

た意が全くなく、皆個人それ自体が力一杯の仕事をしていることです。優秀作の石倉康夫君は無論、小村君、太田君始めとして皆よい仕事をしています。この態度で進んで下さい。只高学年が一寸観念化されてよくない様です。低学年の方が立派です。(木子)

**松江支部** この支部は高学年、特に高校生に驚く程技術の進んだ人が粒ぞろいです。それ丈に自分の技術に頼りすぎて、皆一様に安易で、深い感動を以つて見られる様な作品が少ないことです。その為に高校生は五点をやらす四点の人が多かつた筈です。中学生の花田克夫君はその中で光つていますが、高木和子さんの作品も立派で意欲がもり上つています。／長島君の方は一寸達者さが目につきすぎて安易さを感じさせます。低学年はやはり、こう言う流れの中文に、城西支部に比較して個性的な仕事が少ない様です。もつと実直に人間味のある作品を作られる様御指導していただき度いものです。然し全体の中ではやはり優れて良い支部の一つです。頑張つて下さい。(木子)

※追資六十五 『墨友』第六卷第九号 昭和二十八年(一九五三)九月一日発行 中村木子評

**小学二年高田順子「あめ」** すなおに、元気一ぱいかかれて、しかも大へんうつくしい。あ、のおしまいの切れめや、め、のりもりと人の心にくいこんでくる力など、すばらしいです、すなおな心を大切にそだてましょうね。(木子)

**中学三年黒田泰行「天空一碧」** 今月の中学三年の作品は全体に安易なものが、多かつた様です。君の作品も仲々立派に出来ています、しかしそれも只御手本を真面目に習つたと言うことだけでここで止まりやすい危険を多分にはらんでいます。そこをつき抜けなければ本当のものが生まれませんが、それが仲々大変なことです。ね。先ず第一に白い紙のどこに黒いものがあつたら美しくなるか、と言う事から始めましょう。(木子)

※追資六十六 『墨友』第六卷第十号 昭和二十八年(一九五三)十月一日発行 中村木子評

**慶徳和恵「強い身体」** 六年生の作品の中で一番汚らしいこの作品が、私は一番すきになつてしまいました。それはこの作品に一番量感があり迫力があるからです。これは、素直にかかれています、開いた筆の毛が大きい弾力を持つて紙をはじき返していることなどです。生き生きとした力強い黒い線が白い紙の上に素材にそして縦横に活動しているからです。

※追資六十七 『墨友』第六卷第十二号 昭和二十八年(一九五三)十二月一日発行 中

村木子「かんじょう」

**篠崎英子さん「緑の稲田」**／私の審査した今月の中学二年の中ではあなたの作品が一番美しい、それは形等にとらわれずリズムカルに流れているからです。然も紙屑の悪いのを濃墨で補つて、筆が突いて、はじいて、毛の強力をうまく利用してはづんでいるから、明るくて、さわやかです。糸扁の小など点がうまく利用して、こんどは点に注意して習つて下さい。／

**井戸光子さん「虫を追う」**／形もよくととのつていて、力も充分入つています。特にリズムカルに前の勢を受けて調子にのせてか、れているので、形のみならずきた堅さや、単調さが随分すくわれています。この様に調子を合わせて書く場合、形がくずれたり、ゆがんだりするものですが、そんなことは気にかけないで書きつづけて下さい。／

**前田よしみさん「力一ぱい」**／力一ぱいとほんとうに力一ぱいかかれていてたいへんりつぱです。お手本をよく見てかいてるので、せいかくですし、よく力が入つているので、けんこうです。ほんとうに力一ぱいかきつづけましょうね。

※追資六十八 『書教育』No.8 昭和二十八年(一九五三)十二月一日発行 中村木子評  
(前田よしみ「力一ぱい」)

形もよく整つていて、充分力も入つていて、起筆や、収筆等所謂点画など実に立派にまとまつていて一点の非の打ち処のない作品です。然し私はこの作品から、二年生の子供の作品としての美しさも、楽しさも、子供の夢をも感じ取れることのないのは大変悲しく思います。なる程技術的には先述した通り立派なのですが、それだけ子供の姿が稀薄になつていっています。技術的に教え字はせることのプラスとそれになつて観念が固定化して個々の人間の本質的創造がはばまれることのマイナスとをどの様に計算し、最大公約数を求めるかが、教育の場にある人々の叡智によつて、色々科学的に立証されねばならないと思います。然し私は教育者でない。作家の一人としてたとえ技術的にはマイナスであつても子供の心によつて創造される子供そのものの作品を見せてもらいたかつたし又その様な作品に心から共鳴したい一人です。(中村木子)

※追資六十九 『墨友』第七卷第五号 昭和二十九年(一九五四)五月一日発行 中村木子評(宇山勝宣「若草」を指すか)

けばけばしい、飾気をすて、て、深く根をおろして、澄んで静かに、内へ内へと掘り下げている君の人間として態度は大変立派です。そしてその飾気ない君の人がらが、この作品を通して、何物のも邪魔されずにグングン前進して見る人々をグットおさへつけています。線はやや堅いが、それだけに華やかでなしにジツクリと底から輝いて来

ます。／ 左寄りにかいた所へ、更に割合大きい字で名前を左側に書いてある構成も、この場合左をうんと密にして、右の空間に大きい広りをもたせていて大変成功です。

※追覧七十一 『墨友』第七卷第六号 昭和二十九年(一九五四)六月一日発行 中村木子  
「作品のかんしよう」(中学一年森脇光彦「人間の力」) (『書教育』No.14 同年六月一日発行に再掲)

この二、三ヵ月、二点をくらべて批評をのせたところ、い、方の作品が筆太にか、れているし、よくない方は細い線の作品が多かつた為、太く乱棒にかくのがよいと言、う様な誤った考え方をして、無茶苦茶をして書かれた作品が割合多かつた様ですが、そうではないのです。写真にして雑誌にのせるのと、生まのま、の作品を見るのと大分感じがちがつて来るので、皆さんは判りにくいかも知れませんが、写真を見て生、まの作品を想像して考えて下さい。そこで今月の作品はどちらも中学一年生の伊藤泰宏君と森脇光彦君とをくらべて見ましよう。伊藤君のは一寸見ると線が太く元氣よく素直に思い切つて書かれて見えますがよく見ると、自分の頭の中に太くか、れた手本か何かを考えて居てそれをそのま、まね様としたところが見受けられます。その為筆を無理にこすりつけたり、おしつけたりして線に生き生きとしたものがあります。森脇君のはいかにも中学生らしくまじめに、しかも型とか手本にとらわれていませんので線が高く響いて生きている様です。太いとか細いとかにとらわれず、自分のもので素直に書きましよう。

※追覧七十二 『墨友』第七卷第九号 昭和二十九年(一九五四)九月一日発行 中村木子  
「作品の鑑賞」

寺田茂信君「魚すくい」／ 白い紙の上に、思いきりズバリと黒い線が本当に美しい出来です。左肩の方の余白の処も学年をヌケヌケと大きく入れて成功していますし左中の名前の寺を大きく書いて下に小さい目にか、れた田の字も少しも小さく感じません。素直な、しかも元氣一ぱいな健康に充ちあふれた君が、そのま、紙面で躍動しています。

※追覧七十二 『墨友』第八卷第一号 昭和三十年(一九五五)一月一日発行 中村木子  
「かんしよう」(小学四年中村滋「秋のら」、小学三年室岡和彦「空を地を見よ大きくい雲が笑っているぞ」) (『書教育』No.20 同年一月一日発行に再掲)

今月号の墨友作品中対照的なものとしてこの二点を拵んで見た。室岡君の作品は大変呼吸の長い、ゆつたりとして連続的なリズムの中にとけこんで丁度鄭文公碑な調子で然も三年生の児童としての未分科の状態がそのま、人と筆と紙とが何等の断層を見出されない様な状態のま、定着されている美しい作品である。／ 一方中村

君の方の作品は非常にフテフテしく、自分の内での燃焼が断続的に、あたかも謡曲の鼓の様なりズムを奏でながら深く深く沈んで大変高い響をたゞよはせている、劉石庵の書をしのばせる様な作品だ。／ いずれの作品も作品と作家とが一つになり切っている立派な作品で所謂書法の観念以前のものでありこゝに近代の書を創生する幾多の貴重な養素を多分に蔵している。

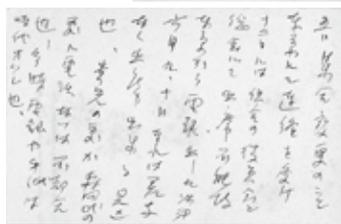
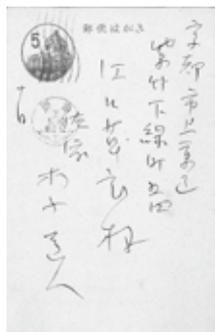
※追覧七十三 『墨友』第八卷第四号 昭和三十年(一九五五)四月一日発行 中村木子  
「—今の子供は字が下手—」猿まねと正しい書の目標

墨友の皆さん、進学御目出とうございます。／ 今日皆さんとお母さん方から読んでいたゞくために、もつとも簡単な、そしてもつとも大切なことがらを考えて見ましよう。さて書教育の進んだ学校や、理解のある先生、お母さんの居られる地方は別として、田舎の地方や、理解のない学校等で、よく「近頃の書や絵は判らない」とか「今の子供の字は下手だ」とか言われます。そこで今までの、或は戦前の子供の字は本當にうまかつたか、今の子供の字はそんなに下手くそかと言う問題はお母さん方としても充分に知っておきたい問題であると思います。戦前又は戦時中の書の展覧会と言うものは私達も何回も拝見しましたが、それはどれもこれも皆一つのお手本をまねて、どれが一番お手本に似たものを書いてあるかと言うことを審査の標準にして、それに近いもの程よい点がついていました。それはちようど人間を猿まねさせて、猿によく似た人間程らしい人だと言うこと、同じことですね。ところがさう言う風にまちがった審査をしているのを、それが本當の見方だと思つて今時でもそのま、の考えで、人間らしくて猿に似ていないから下手くそだと考え、お母さん方がえらく心配されているのです。人間が猿になつたり馬になつたりしては大変ですね。それだからその様な教育では卒業して社会人になつてもお手本がなければ何もかけない様な人が出来上つてしまつたのです。言いかえると九官鳥やオームみたいに他人のまねや人間の言葉をまね出来ても自分の泣き声を忘れた様な片端な人間が出来上つてしまつたのです。私達はそんな教育がなされては困つたものだと心から心配しているのですが、さつき書いた様に今でも田舎や、無理解な学校ではそんなことが行われ、墨友に色々関係している先生方は別として、他の学校の先生方の中では多くの先生方自身が、自分でもお手本がなければ書けない人が多いのです。画の方では今から三十年位前まではお手本を見て画を書く方法が画の教育で行われましたが、今ではお手本を見て画をかく等とは考える人さえ少ないのです。そして風景や静物を写生するとしても写真の様にそのま、写して画くのではなくて、自分の目でしつかり物を見て自分のものを画くと言うふうになつています。この自分の目でものをよく見ると言うことが大切なことなのですが、書の方ではなるべく自分の目に暮をはつて見せないで、単にそのま、真似させると言うことを今でもやらせているのです。

かような行き方は少くとも五十年も時代遅れのやり方です。ですから本当に自分の目で物を見たり、人間が猿や馬のまねをしないと下手だとか判らないとか言っているのです。したがってお母さん方は少しも御心配なさらなくてもよいので、五十年も時代遅れの人々の言うことを聞いて心配される理由は少しもありません。／例えば理科の問題にしても昔の教育では画をかくて自動車はガソリンがこゝで気化して、こゝして着火、爆発してピストンが動いて車が廻ると言う風に頭の中学問として教えたのですが、今では実際の自動車を動かして先に車が廻るのはどうして廻るかと言うことから一つ／＼逆に疑問をといて行くと言う方法がとられています。頭の中で知ると言うことより、自分で経験して見て知ると言う様に変つています。頭のまねをして、次に犬、猫、馬、と色々な真似をしていて最後に、犬でも猫でも馬でもない自分を表すと言うのは、単なる理屈であつてそれでは何時迄たつても九官鳥の域を出ることが出来ないのです。これは始めから看板でもポスターでもノートの手紙でも、自由に自分の思いのままに書く修練をつむことが大切です。自分が犬や猿のまねをするのでなくて、何時でも自由に犬や猿を使うことの方が大切なのです。／墨友でもその様な立場から書教育を取り扱つて、本当に書教育を通しての人間形成と言うことに徹して色々案を立て、実践しているのです。ですから「今の子供の書が本当の書で、決して今の子供は下手くそでない」ということをしつかりつかんで頂いて、お母さん方の御協力をお願い致します。

※追資七十四 昭和三十一年(一九五〇)五月十日付 中村木子、江口草玄宛手紙 ペン 図版40

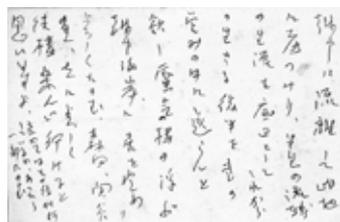
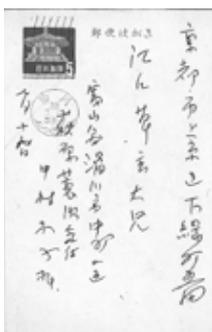
(表) 京都市上京区紫竹下緑町五四／ 江口草玄様／佐渡／ 木子道人／十日／  
(裏) 五日集合変更のこと東京にて連絡を受け十二日には組合の役員会と総会出席不能故東京から電報出した次第／六月九、十日なれば差与なく出席出来見込也。貴兄の処か森田氏の処に電話ないは不都合也。今時電報や手紙は時代オクレ也。



※追資七十五 昭和三十九年(一九六四)三月十一日消印 井上有一、江口草玄宛手紙  
(表) 京都市北区紫竹下緑町54／ 江口久男様／ちがさき市ひしぬま三〇〇三／井上有一／  
(裏) 運命というか宿命というか、そういうものをヒシヒシと感じます。兄の手紙の返事の出しようもなく今日まで延び／＼になってしまいました。今にしておもえばいろ／＼おもい当るふしもあるし…作品もかけぬわけでした。／とにかく木子の住所がわかり直接連絡がとればバとおもいますが、如何ですか。その当てハありますか。／いづれ精神的に当時の関係者によびかけてなんとかするにしても。森田さんハどんな意見ですか。

※追資七十六 昭和三十九年(一九六四)七月十九日付 中村木子、江口草玄宛手紙 ペン 図版41

(表) 京都市上京区下緑町五四／ 江口草玄大兄／富山県滑川市中町二区／萩原襄次気付／ 中村木子拜／七月十九日／  
(裏) 越中に流離して此地に落つけり。半生の流伝の生涯を底辺としてこれからの生きる後半を書の営みの中に送らんと欲し蜃気楼の浮ぶ越中海岸に居を定めりよろしくたのむ。森田、関谷／有一、太星はその後刊行しているか。あつたら一部位のむ



※追資七十七 昭和三十九年(一九六四)十一月二十四日消印 井上有一、江口草玄宛手紙

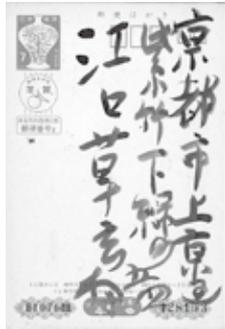
(表) 京都市北区紫竹下緑町54／ 江口草玄様／ 茅ヶ崎市菱沼三〇〇三 井上有一／  
(裏) 木子の件、兄の便りをきき、小生もこの間ハガキ出してみたら、今日やはり転居先不明で戻ってきた。どうした事情なのか、コレハ一つ土地に詳しい兄の方で調べてみて下さい。

※追資七十八 昭和四十四(一九六九)年年賀状 中村木子、江口草玄宛 図版42

(表) 京都市上京区紫竹下緑町五四／江口草玄様／

(裏) 元旦／賀正／中村木子

図版42



※追資七十九 昭和四十七年(一九七二)四月七日消印 中村木子、江口草玄宛手紙

墨、和紙 図版43

(封筒裏) 603／京都市北区上京紫竹下緑町五四／

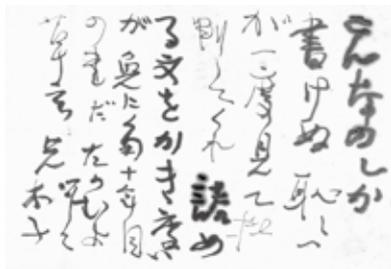
江口草玄様／

(封筒裏) 富山県滑川市大町一七五六／ 中村木子／

こんなのか書けぬ恥しいが一度見て批判してくれ読める文をかき度いが兎に角十年目の書だ たのむよ／かしこ／草玄兄 木子

【同封】《聖無動尊大威怒王秘密陀羅尼教》(図266)と《神徳無量》写真(図265)(裏に)個展作品です／御笑覧下さい

図版43



※追資八十 昭和四十七年(一九七二)七月十四日消印 井上有一、江口草玄宛手紙 墨

(表) 603／京都市北区紫竹下緑町54／ 江口草玄様／ちがさき／ 井上有一／

(裏) 現代書展作品写真トハミンナノカートニカク写真ハチヤントシタモノアリマセン。ソレカラ、ナニヨリモ記事ナニモナクコトアリマセン。モシカケバトンデモナイコトニナルシ：スママセン：) 木子、コノ間中、相川音頭の古謡ヲサガシテモラウノニセワニナリマシタ。字ヲヤリタイガドコガイイカトイウカラ、ヤハリソウナ

レバ墨人以外ニナイ：トイワザルヲエマセンデシタ。